2.本論

2.1.単文構造における重叙表現

2.1.1.世界の諸言語に見られる目的語重叙の例

序論でも述べたように、目的語の重叙表現はバルカン諸言語にのみ見られるものではない[1]。イタリア語やスペイン語など他の印欧語でも珍しくない[2]だけでなく、非印欧語でも重叙表現、またはそれに類する現象が確認されている[3]。

まず非印欧語であるスワヒリ語の例（Givón 1984: 360-372）を示す[4]。

(1) ni- li- mw-ona mtoto.

I (past) him see child 「私は子供を見た」［＋human］［－definite］

(2) ni- li- mw-ona yule mtoto.

I (past) him see the child 「私はその子供を見た」［＋human］［＋definite］

(3)* ni- li- Ø- ona mtoto／yule mtoto.

I (past) see child／the child

(4) ni- li- Ø- ona kikapu.

I (past) see basket 「私はかごを見た」［－human］［－definite］

(5) ni- li- ki-ona kikapu.

I (past) it see basket 「私はそのかごを見た」［－human］［＋definite］

---

[1] 理論言語学的なアプローチとしては Jaeggli (1986)。

[2] ブルガリア語とフランス語との対照研究の例としては Asenova (1980)。またスペイン語との対照例としては Кънчев (1972)。

[3] 次に示すのはヘブライ語の例で、限定された事物を示す(a)において“special case-marking”が行われている（Givón 1978: 305－306）。

(a) kaniti et ha-sefer etmol.
bought-sg.1 ACC the book yesterday 「私は昨日その本を買った」

(b) kaniti Ø sefer-xad etmol.
bought-sg.1 book one yesterday 「私は昨日本を（１冊）買った」

この他の例としては、ヒンディー語やハンガリー語、また他のフィン・ウゴル語にも同様の特徴が見られるという。

[4] Givón は［human］／［inanimate］で区別しているが、ここであげる例に関しては指示物の［human］と［animate］を厳密に分ける必要がないと思

(1)(2)の様にスワヒリ語では、［＋human］な目的語は形態の定／不定に関係なく重叙が義務的であり、(3)は非文である。これに対して(4)(5)の様に［－human］な目的語は-ki-による重叙を伴うことで限定される様になっており、指示物の限定／非限定に重叙が関与するという傾向を示している。

これとよく似た傾向は 1.3.1.であげたスペイン語にも存在することが知られている。ここでは直接目的語を含む例（Givón 1984: 372）によってこれを見ておこう。

(6) Le　vi　a Juan　en la calle.
him saw-sg.1 to Juan　in the street　「私は通りでフアンを見た」
［＋human］［＋definite］

(7)* Vi　a Juan　en la calle.
saw-sg.1 to Juan　in the street

(8) Vi　el　arbol　en la calle.
saw-sg.1　the　tree　in the street　「私は通りでその木を見た」
［－human］［＋definite］

(9)? Lo　vi　el　arbol　en la calle.
it　saw-sg.1　the　tree　in the street

スペイン語では(6)の様に［＋human］な直接目的語[5]が重叙代名詞 le を必須の要素とするのに対し、(8)の様に［－human］な直接目的語では重叙を伴わないことが普通である[6]。

また 1.3.6.で言及した resumptive pronoun としての機能という観点から見れば、英語にも重叙表現が存在すると言えるだろう。

例えば次の英文の例(10)は、談話文法において「左方転移（left

われるので、［＋human］／［－human］で統一しておく。

[5] 1.3.1.の例(9)における a Juan は間接目的語、ここでは直接目的語として訳してある。

[6] 後述するが、ロマンス語のこうした傾向はアルバニア語のそれと異なるか、場合によってはまったく正反対に見える。詳しくは 2.1.3.1.および 2.1.3.4.。

dislocation)」[7]と呼ばれるものである（福地 1985: 77-80）が、文頭に置かれた the play を指示する代名詞 it が後置されており、目的語が重叙される構造になっている。

(10) The play, John saw it yesterday.

「その芝居ならね、ジョンは（それを）昨日見たんだ」

もっとも、英語のこうした特殊な発話に比べるとスペイン語やアルバニア語の重叙はごく自然な文脈においても起こり、むしろ安定した統語構造の一部を成しているとも言えるのであって、やはり異なる種類のものとして考えていくのが妥当であると筆者は考える。

2.1.2.重叙表現をめぐる歴史的見解

前節で述べた通り、人称代名詞（主に３人称）による目的語の「繰り返し」は他地域の言語にも存在するわけだが、密接した言語間で同種の現象が相互に影響し発展しているバルカン諸言語（標準セルビア語を除く）に

---

[7] この本文の例に対して、単に話題の焦点となる目的語が文頭に移動しただけのものを福地（1985: 73ff.）は「焦点の話題化（focus topicalization）」と呼ぶ。もっとも談話構造上の機能について言えば、文頭の要素が聞き手の注意を喚起し､残りの部分で何かを述べるという点で大きな違いはない。しいて相違点をあげれば、話題化が行われた英文では文の残りの部分にほとんど重要性がなく、文頭のみを発話しても自然に受容される。次の例では、答えが“Fried eels.”だけでも明らかに会話が成立する。

“What do you like to eat?”　「何が食べたい？」

“Fried eels I like to eat.”　「うなぎのフライだね、食べたいのは」

また補文節に関しては下の(b)の様な補文節繰り上げ（sentence lifting）がある（山梨 1986: 134-137）が、これはもはや重叙と言うには疑わしい。主節動詞の種類が限定される（believe や ask）上に、後置された動詞が it や so を伴うこともまずないからである。

(a) I believe John is here.　「私はジョンがここに来ると思う」

(b) John is here, I believe.　「ジョンはここに来る、私は（そう）思う」

は、重叙現象発生の起源や言語間の発展経路などをめぐる通時的問題が存在する。そこで、この現象の歴史的起源を巡る諸説をごく簡単にまとめておこう[8]。

重叙現象の歴史的経緯には依然不明の点が多いが、比較的新しい包括的見解（Demiraj 1993 及び 1994）によれば、確定した文法形式として定着・発展した時期は、これまで考えられてきた程古いものではないという。基層言語であるイリュリア語からアルバニア語への継承による言語現象という説（Miklosich 1862）には、今日なお議論の余地がある[9]。

いま一つの仮説は、ヴルガタ・ラテン語からの借用、定着（Илиевски 1972/1973）というものである。しかしバルカン諸語内における重叙現象の拡大定着は、同時期の西ロマンス語よりもはるかに規模が大きく、ヴルガタに起源を求める程古いものでもない（Demiraj 1993: 219）。

ブルガリア語とマケドニア語からの影響による（Милетичь 1937）という見方もある[10]。確かに両言語とアルバニア語との歴史的接触は事実である（Конески 1965: 186）が、しかしながら両言語の重叙現象は 9 世紀以降に現れ、早くとも 12～13 世紀に他のバルカン諸語の影響下で成長したものと考えられる。他のスラヴ諸語に同様の現象が見られない点からしても、これを南スラヴ語固有の現象と見るのは難しい（Demiraj 1994: 136-137）[11]。

一方、ルーマニア語からの影響という説もある[12]。目的語と弱形代名詞の併用については、各ロマンス語で不均一な発展が見られる。ルーマニアで重叙現象が確認されたのは 16～18 世紀であるが、現在の様な頻出は認められないという記述がある（Demiraj 1993: 219）[13]。 アルバニア語とマケドニア語で義務的な間接目的語の重叙はルーマニア語において任意、また

---

[8] 以下本文で示すもの以外には Schaller（1975, 161-171）などがある。
[9] 同様の研究としては他に Miklosich (1870)。
[10] この他 Илиевски (1965)や Мирчев (1966)。
[11] この他 Младенов (1968)。
[12] ルーマニア語とアルバニア語の音韻面での相互関係については Brâncuş (1977)。
[13] ルーマニア語の重叙の範囲が現代語においてより拡大しているという指摘（Steriade 1980）がある。

直接目的語の重叙は前置詞 pe の有無等により用法が制限される（林 1990）。

では、ギリシア語から周辺言語への影響は考えられるだろうか。Илиевски（1972/1973: 216） は、ヘレニズム期のギリシア語に目的語の二重表現が見られるが、これは結局体系化されておらず、またアルバニア語等と接触していた北部方言を除き、現代ギリシア語のどの方言にもこの特性が現れなかったことを指摘している。代名詞重叙は、書かれたテクストに関する限りそれ程古い現象ではない（Demiraj 1993: 137）。

2.1.3.先行研究

ここでは、重叙表現の問題を取り扱った主要な論文の概要を述べる。

2.1.3.1. Buchholz（1968）および Buchholz/ Fiedler（1989）による重叙例の分類

2.1.3.1.1. Buchholz（1968）

Buchholz（1968）は当時活発に行われていた変形生成文法の理論をアルバニア語の重叙表現に適用し、句構造規則と変形規則[14]を設定することによって、単文の重叙表現を次の様に分類した[15]。

---

[14] 句構造規則（F）と変形規則（T）は次の通り；
F1：S→NP+VP
F2：VP→（Pv）Aux+HV　　Pv；肯定あるいは否定の小辞　HV：主動詞節
F3：HV→Vb（VE）　　VE；動詞補足節
F4：VE→（OM1+Nom1）（OM2+Nom2）（Advb）
　OM=object marker　　OM1+Nom1；対格目的語　OM2+Nom2；与格目的語
T1：X　Vb　（OM1）（Nom1）（OM2）（Nom2）Y
　1　2　3　4　5　6　7　→1　5+3+2　4　6　7
T2：X　OM1　Vb　Nom1　Y
　1　2　3　4　5　→1　3　4　5
　ただし Nom1=Du（Numu）Sb（Du；不定冠詞 një または ϕ　Numu；数詞または不定代名詞）のとき義務的その他の場合は任意の変形。Nom1 は人称代名詞でなく、X が対比語であってはならない。
T3：X　OM1　Y　Nomi　Z
　1　2　3　4　5　→1　2　3　5
　ただし i=1,2。任意の変形。X±｛強調　対比｝。Y±｛前置詞｝

以上のことから；
a）OM2　V　Nom2
b）V　Nom1,　Nom1=Du（Numu）Sb
c）OM1　V　Nom1,　Nom1=｛Dbest（Numbest）Sb｝　　best；限定
d）Nom1　Om1　V1,　Nom1=Du（Numu）Sb
e）Nom1　OM1　V,　Nom1=｛Dbest（Numbest）Sb｝
となる。

[15] この研究とほぼ同時期で、アルバニア語話者の日常使用に資する範囲で重叙の問題に言及しているものとしては Vokshi (1955)、Naçe (1963)。なお Vokshi もこの現象を「冗長な（“pleonastike”）」代名詞の繰り返しと述べている。

(a) 間接目的語の重叙削除は禁止される。

(11) Libri i vlen Agimit.

book-df.sg.nom. 3.sg.dat. be worth-sg.3 Agim-df.sg.dat.

「その本はアギムに役立つ」

(b) 動詞の前に来る不定直接目的語は重叙削除が必須とされる。

(12) Bleva një libër.

buy-aor.sg.1 one book-indf.sg.acc.

「私は本を 1 冊買った」

(c) 動詞の後に来る定形あるいは指示代名詞による限定を受けた直接目的語の重叙削除は任意とされる。

(13) (E) lexova librin.

3.sg.acc. read-aor.sg.1 book-df.sg.acc.

「私はその本を読んだ」

(d) 動詞の前に来る不定直接目的語の重叙削除は任意とされる。

(14) Një libër (e) bleva.

one book-indf.sg.acc. 3.sg.acc. buy-aor.sg.1

「1 冊の本を私は買った」

(e) 動詞の前に来る定形直接目的語の重叙削除は禁止される。

(15) Librin e bleva.

book-df.sg.acc. 3.sg.acc. buy-aor.sg.1

「その本を私は買った」

(f) 直接目的語が強形人称代名詞である場合、重叙の削除は禁止される。

(16) Ai më njeh mua.

3.m.sg.nom.1.sg.acc. know-aor.sg.3 1.sg.acc.

「彼は私を知っている」

(g) ただし、対比の関係にある強形人称代名詞が並立する場合、重叙の削除は任意とされる。

(17) Mësuesi (më) thirri mua dhe jo ty.

teacher-df.sg.nom. 1.sg.acc. call-aor.sg.3 1.sg.acc. and not 2.sg.acc.

「先生が呼んだのは僕で、君じゃない」

従って、動詞の後に置かれた不定直接目的語が重叙したり、間接目的語が重叙していなかったりする次の 2 例は「規則」に反するとされる。

(18)? Po ta dërgoj një fotografi.

now particle+3.sg.acc. send-subj.sg.1 one photo-indf.sg.acc.

「私は 1 枚の写真を送ろう」

(19)? ø Epni zë burravet!

give-imp.pl.2 voice-indf.sg.acc. man-df.pl.dat.

「その男たちに声をかけなさい」

2.1.3.1.2. Buchholz/ Fiedler（1989）

単文における重叙表現の有無には、重叙を伴う名詞の定形／不定形の区別が関与する。従って、アルバニア語ではどのような場合に名詞が定形あるいは不定形となるかについて、あらかじめまとめておく必要があろう。

ここでは、名詞定形の分類についてもっとも網羅的な記述が見られる Buchholz＆Fiedler（1989）にもとづき、以下にこれを整理し列記しておこう。[16]

I 定形語尾を取る名詞

(a) 指示物が聞き手にとって、文脈上既知である場合。

(20) Na ishte njëherë një mbret plak.

pl.dat.be-impf.sg.3 once one king-indf.sg.nom. old

Mbreti u sëmur…

[16] 同一研究者の先行研究としては Buchholz (1977)。また不定形の条件については Newmark/ Hubbard/ Prifti（1982）にも詳しく、これも参考とした。

king-df.sg.nom make ill-pas.aor.sg.3
「むかしあるところにひとりの年老いた王様がいました。その王様が病気になり…」

(b) 先行文脈で示されたものの「部分」を構成する、と理論的に判断し得る場合。

(21) U ulën pranë dritares nga dukej potri,
set-pas.aor.pl.3 near window-df.sg.abl. where see-pas.sg.3 port-df.sg.nom.
dhe soditnin vinçat, vaporët dhe anijet.
and build-impf.pl.3 crane-df.pl.acc. steamship-df.pl.acc. and ship-df.pl.acc.
「彼らは港が見える窓際に腰掛けた。(その港の)クレーンや蒸気船や旅客船が建設されていた」

(c) 言外の知識において何を指すか明らかなもの。特に会話中の命令文に多い（動詞には重叙弱形代名詞が融合している)。

(22) Mbylle dritaren!
close-imp.sg.2+3.sg.acc. window-df.sg.acc.
「(そこの）窓を閉めろ」

(d) 文学テクストの手法として、本来読み手が知らないはずの事項を既知であるかのように描写する場合。

(23) Megjithëse i kishte rënë ziles tri herë, rojtari
although 3.sg.dat. ring-plpf.sg.3 bell-df.sg.dat. three times guard-df.sg.nom.
nuk po dukej ende.
not now see-pas.impf.sg.3 yet
「呼び鈴を（lit.『呼び鈴に』）三回鳴らしたが、（そこの）守衛は姿を見せなかった」

(e) 一般に既知とされる固有名詞[17]

(24) Agim po vëzhgon hënën.

Agim-indf.sg.nom. now watch-sg.3 moon-df.sg.acc.

「アギムは月を眺めている」

(25) Shqipëria është vend malor.

Albania-df.sg.nom. be-sg.3 land-indf.sg.nom. mountainous

「アルバニアは山国だ」

(f) 指示された主語と述語内容が同一のものであることが話題にされる場合。

(26) Agimi është kryetari.

Agim-df.nom. be-sg.3 chairman-df.sg.nom.

「アギムがその議長だ」

（Agim është kryetar.『アギムは議長だ』とは文脈が異なる。Ⅱの(e)参照）

(g) ３人称の所有を含む親族名称[18]

(27) i ati

his / her / their father

「彼の／彼女の／彼ら（彼女ら）の父」

(h) 複数形が民側や国民の総体を示す場合。

(28) Arbëreshët kanë ruajtur gjuhën e tyre.

Arberesh-df.pl.nom. keep-pf.pl.3 tongue-df.sg.acc. their

---

[17] 固有の指示物となる名詞と形容詞の組み合せも定形を取る。

populli shqiptar 「アルバニア人民」
people-df.sg.nom. Albanian

[18] アルバニア語の親族名称には、前置形容定冠詞を伴って３人称所有形容詞を含意するものがある。例えば baba「父」と所有代名詞を用いた形、すなわち babai i tij「彼の父」／babai i saj「彼女の父」／babai i tyre「彼ら（彼女ら）の父」はいずれも i ati と言うことができる。

「アルバレシュ（人）は自らの言語を守った」

(i) 単数形が総称としての意味を持つ場合。

(29) Hekuri është një metali i forte.
iron-df.sg.nom. be-sg.3 one metal-df.sg.nom. hard
「鉄というものは硬い金属だ」

(j) 会話の状況から、指示物の所有主（話し手、聞き手、その他話題になっている人物）が明らかなもの。
(30) “Mos flitni me zë të lartë
not speak-imp.pl.2 with voice-indf.sg.acc.loud
se do të më zgjoni djalin”, tha nëna.
that will 1.sg.dat. wake-subj.pl.2 boy-df.sg.acc. say-aor.sg.3 mother-df.sg.nom.
「大きな声を出さないで、私の子どもを起こしてしまうでしょ」と母は言った。

(k) 所有代名詞、名詞属格、序数詞、形容詞の最上級、形容詞「あらゆる」や「すべての、まったくの」、関係節、副詞等により名詞が限定される場合（例外もある）。
(31) shoku im
comrade-df.sg.nom. my
「我が同志」
(32) Krisma e një rrufeje u duk sikur e
crack-df.sg.nom. one thunder-indf.sg.gen. see-pas.aor.sg.3 as if 3.sg.acc.
çau tokën dysh.
split-aor.sg.3 earth-df.sg.acc. twice
「稲妻が大地を真っ二つに切り裂くかに見えた」
(33) gjithë nxënësit
all pupil-df.pl.nom.

「全生徒」

(34) Kapedani që priste populli, erdhi.

captain-df.sg.nom. which wait-impf.sg.3 people-df.sg.nom. come-aor.sg.3

「民衆の待望していた司令官がやって来た」

(l) 慣用句。

(35) marr fjalën

take word-df.sg.acc.

「喋る（lit.『言葉を取る』)」

(36) jap fjalën

give word-df.sg.acc.

「約束する（lit.『言葉を与える』)」

(37) më zë gjumi

1.sg.acc. catch-sg.3 sleep-df.sg.nom.

「私は眠る（lit.『私を眠りがとらえる』)」

(m) 形容詞、代名詞、数詞が定形語尾を取り、名詞となる場合。

(38) I pari është aviator.

first-df.sg.nom. be-sg.3 aviator-indf.sg.nom. 「長男は飛行士だ」

Ⅱ 不定形語尾を取る名詞

(a) 話し手にとって既知の指示物が、聴き手には未知である場合。

(39) Në hijen e manit rrinin pleq.

in shade-df.sg.acc. mulberry-df.sg.gen. stay-impf.pl.3 old man-indf.pl.nom.

「桑の葉陰に老人たちが腰掛けていた」

(b) 附加語を伴わない単数名詞が前置詞 në「～に」、me「～と共に」、mbi

「～の上に」、ndër「～の間で」、prej「～から」などの後に来る場合。[19]

(40) Llamba　　është　mbi tavolinë.

lamp-df.sg.nom. be-sg.3 on　table-indf.sg.acc.

「ランプが机の上にある」

(41) Ai është　prej　Berlini.

he be-sg.3 from　Berlin-indf.sg.abl.

「彼はベルリン出身だ」

(c) 呼びかけ。不定形主格が普通である[20]

(42) Agim,　　eja　　këtu!

Agim-indf.sg.voc. come-imp.sg.2　here

「アギム、こっちにおいで」

(d) 等位接続詞で結ばれた名詞による対句表現では、共に不定となることが多い。

(43) Atë　　e　bijë　　iu

father-indf.sg.nom. and daughter-indf.sg.nom. 3.sg.dat.+bring

afruan　　monumentit.

near-med.aor.pl.3　monument-df.sg.dat.

「父娘は記念碑に近付いた」

(e) 主語の特性や職種を示す述語主格[21]

(44) Agim　　është　mësues.

---

[19] 実際の話し言葉では、附加語があっても不定形を取るような例外も存在する。

　　në hyrje　　të qytetit

　　in entrance-indf.sg.acc. city-df.sg.gen.　　「市の入口で」

[20]不定形語尾-ë を取る固有名詞では、定形語尾-a を用いる場合がある。

　　Drita,　　eja　　këtu!

　　Dritw-df.sg.nom.　come-imp.sg.2　here　　「ドリタ、こっちにおいで」

[21] 英語 I am a student.とは異なるが、ドイツ語 Ich bin Student.に似た用法で

Agim-df.sg.nom. be-sg.3 teacher-indf.sg.nom.　　「アギムは教師だ」

(f) 指示物に対し、同格の述語補語として用いられる場合。

(45) E　　kam　　mik.

3.sg.acc. have-sg.1 friend-indf.sg.acc.

「彼は友達だ」

(46) E　　zgjodhën　　Agimin　　sekretar.

3.sg.acc. elect-pl.3　Agim-df.sg.acc. secretary-indf.sg.acc.

「彼らはアギムを書記に選んだ」

(g) 属性を示す奪格は不定形。

(47) mish viçi

meat calf-indf.sg.abl.

「牛肉」

(48) këngë dasme

song wedding-indf.sg.abl.

「婚礼歌」

(h) 部分名詞または不可算名詞[22]。

(49) ha　bukë

eat bread-indf.sg.acc.

「パンを食べる」

(50) pi　　kafe

drink coffee-indf.sg.acc.

「コーヒーを飲む」

ある。

[22] ここにあげた表現は「メシを食う」「一杯やる」といった意味で固定された表現でもある。その点でこの２つはⅡの(l)にも分類することができる。

(i) 事物を指して問う「何？」に対する応答。

(51) Ç’ është ky? Ky është telefon.

what be-sg.3 this this be-sg.3 telephon-indf.sg.nom.

「これは何ですか？これは電話です」

(j) 性質の比較に用いる場合。

(52) Agimi luftoi si luan.

Agim-df.sg.nom. fight-aor.sg.3 as lion-indf.sg.nom.

「アギムは獅子のごとく戦った」

(k) 同一名詞の反復による副詞句。多くは慣用句である。

(53) shtëpi më shtëpi

house-indf.sg.acc. to house-indf.sg.acc.

「いたるところに（lit.『家から家へ』）」

(54) gur mbi gur

stone-indf.sg.acc. on stone-indf.sg.acc.

「少しずつ（lit.『石に石を』）」

(l) 慣用句。定形を取る場合（Ｉの(l)）より種類は多い。

(55) bëj fjalë

make word-indf.sg.acc.

「噂する（lit.『言葉を作る』）」

(56) heq dorë

draw hand-indf.sg.acc.

「あきらめる（lit.『手を引く』）」

(57) marr frymë

take breath-indf.sg.acc.

「呼吸する（lit.『息を取る』）」

(58) Më jep dorë.

1.sg.dat.give-sg.3 hand-indf.sg.acc.

「彼は私を助ける（lit.『彼は私に手を貸す』)」

(m)「存在する」の意味で用いられる動詞 kam の目的語。フランス語 Il y a... に相当する表現。

(59) Kishte shtëpi.

have-impf.sg.3 house-indf.sg.acc.

「家があった」

(n) 形容詞や所有人称代名詞が名詞に前置される場合。ただしこの時は形容詞自体が定形語尾を取る。

(60) i dashuri vëlla

dear-df. brother-indf.sg.nom. 「親愛なる兄弟」

(o) 基数詞 një「１」、dy「２」、tre「３」、…、不定量を示す形容詞 çdo「どれも、各々の」、shumë「多くの」、disa「いくつかの」、また指示形容詞 ai「その、あの」、ky「この」や疑問代名詞 cili「誰」、ç'「何」などを伴う場合。

(61) Disa kooperativistë po ktheheshin

some co-operativemember-indf.pl.nom. now return-med.impf.pl.3

nga puna.

from work-df.sg.nom.

「数人の協同組合の労働者が仕事から帰ってきた」

(62) Ç' punë ke bërë më pare?

what work-indf.sg.acc. do-pf.sg.2 before

「以前はどんなお仕事をしていたのですか？」

(63) Ky muaj është marsi.

this month-indf.sg.nom. be-sg.3 March-df.sg.nom.

「今月は３月です」

(p) 否定語が指示物の存在そのものを否定している場合。

(64) S’ ka mbetur djalë në fshat.

not stay-pf.sg.3 boy-indf.sg.nom. in village-indf.sg.acc.

「村には男子がひとりも残っていない」

(65) Mal s’ të sheh syri,

mountain-indf.sg.acc. not 2.sg.dat. show-sg.3 eye-df.sg.nom.

as breg, as gurë.

nor hill-indf.sg.acc. nor rock-indf.sg.acc.

「山も丘も岩も君の目には入らない」

2.1.3.2. Kazazis/ Pentheroudakis (1976)

Kazazis/ Pentheroudakis (1976)は Buchholz (1968)中で不適格とされた文例について、それが低い出現頻度の為に例外とされたものであって、先行文との関わりを考えれば、幾つかの条件下では妥当であると考えた。この論文中には現代ギリシア語等の例も出されているが、ここではアルバニア語についてのみ示す。

例えば、写真に関する話題が全く出ていない状況で「一枚の写真」という不定直接目的語が重叙を伴うことは、確かにない。

(66) "Ç' po bën?"

what (particle) do-sg.2

(67) "Po të ø dërgoj një fotografi."

now send-subj.sg.1 one photograph-indf.sg.acc.

「何してるの？」「写真を一枚送るつもりなんです」

だが、話者が予め写真に関する話題を受けているか、又は話者自分が『写真』を話題にするということを意識している場合の発話では、事情が異なる。

(68) "Po ta dërgoj një fotografi."

now particle+3.sg.acc.send-subj.sg.1 one photograph-indf.sg.acc.

「(その例の) 写真を一枚送るつもりだ」

不定直接目的語が、先行文脈の内容を再度示す為に用いられることも、実際にはよくある。これらを言及済みの内容を示す特定（specified）の不定直接目的語とし、全く新しい情報を構成する不特定（non-specified）のもの[23]と区別すれば、前者には「話題化」や「談話再導入」としての重叙が起こったと考えられる。Kazazis/ Pentheroudakis (1976)は、このことをさらに幾つかの文例で示している

(69) Miti s' e priste kurrë një sjellje të tillë.

Miti-nom.not 3.sg.acc. expect-impf.sg.3 never one behaviour-indf.sg.acc. such

（或る人の行動を目の当たりにして）

「ミティは（彼女がいま目にしたところの）そんな振舞いを予期してなかった」

(70)Hajde, haje dhe ti një kafshatë bukë

Come on! eat-imp.sg.2+3.sg.acc. and 2.sg.nom.one mouthful bread-indf.sg.acc.

me ne!

with 1.pl.acc.

（長い旅の後に―恐らく腹を空かせて―家へ戻った人物に対する家族の第一声）

「御入り、おまえも一緒に（お待ちかねの）パンを食べなさい」

2.1.3.3. Berent (1977)

マケドニア語の目的語重叙も、不定対格の重叙が差し当たり禁じられる点ではアルバニア語に似ている。

(71) Петре го изеде јаболкото.

Peter 3.n.sg.acc. eat-sg.3 apple-df.sg.acc.

「ペートレは（その）林檎を食べる」

(72) Петре ø изеде јаболко.

---

23 「特定／不特定」と「定／不定」の使い分けについて、ここでは各先行研究に従っている。なお、この用語の用法については Lyons（1999: 173ff.）が最も新しく詳しい。

Peter eat-sg.3 apple-indf.sg.acc.

「ペートレは林檎を食べる」

(73)* Петре го изеде јаболко.

Peter 3.n.sg.acc. eat-sg.3 apple-indf.sg.acc.

そして、それが必ずしも守られていない点も同様である。

(74) Сакам да го плукнам еден човек.

want-sg.1 that 3.m.sg.acc. spit-sg.1 one man-indf.sg.acc.

кој беше вчера кај тебе.

rel.pron.m.ag.nom. be-pret.sg.3 yesterday at 2.sg.acc.

「昨日君の所にいた（一人の）男に唾を吐きかけてやりたい」

(75) Вчера ги видов един луѓе како

yesterday 3.pl.acc. see-aor.sg.1 some people-indf.pl.acc. as

одам кон долината.

go-pl.3 toward valley-df.sg.acc.

「昨日私は、谷を渡る一団を見た」

しかし、Berent の注意はむしろ別の点に在る。文例(74)(75)は何れも関係節等により目的語を後方から限定するもので、重叙と先行文脈とはおそらく何の関係もない。Berent はこれについて、Kazazis & Pentheroudakis (1976) のいう「特定・不特定（specified／non-specified）」は厳密に言って別な条件であり、上に挙げた様な相違こそ特定・不特定（specific／non-specific）であると見ている。その様な条件もないとすれば、不定対格はやはり重叙を伴わないことになる。例えば、(76)は問題ないが、これが(77)の様に重叙すると非文であるという。

(76) Сакам да ø плукнам еден човек, но не знам кого.

want-sg.1 that spit-sg.1 one man-indf.sg.acc. but not know-sg.1 .m.ag.acc.

「唾を吐きかけてやりたい男が一人いる、どこの誰かはわからんが」

(77)* Сакам да го плукнам еден човек,

want-sg.1 that 3.m.sg.acc. spit-sg.1 one man-indf.acc.

но не знам кого.

but not know-sg.1 pron.m.ag.acc.

2.1.3.4. 林（1990）

ルーマニア語の代名詞による重叙は、単文レヴェルについて見た場合、目的語が人間を指すもの（[+human]）かそうでない（[－human]）か、直接目的語が特定の前置詞 pe を伴うか否かで条件が異なる[24]。次の２例の場合、(78)の様に目的語 altul が人間を指す時のみ pe が付与され、さらに代名詞弱形により重叙を生じている。

(78) L- am văzut pe altul.

3.m.sg.acc. see-pf.sg.1 (prep.) other-df.

「私は別の人を見た」

(79) ø Am văzut altul.

see-pf.sg.1 other-df.

「私は別のものを見た」

林は、「pe＋直接目的語」が文中に於いて有標の焦点を示すこと、又有標性には段階があり、その程度をより高める為に重叙が生じる様になっていることを示している。即ち重叙によって、次の(80)の様に「pe＋直接目的語」を談話の焦点として導入したり、或いは(81)の様に有標の主題として用いる等の効果が与えられる[25]。

(80) L- am sfătuit să nu -i chinuiască

3.m.sg.acc. advise-pf.sg.1 that not 3.m.pl.acc. torture-sg.3

---

[24] ルーマニア語の名詞定形語尾については Coteanu (1956, 1958)、Farkas (1978)、Farkas/ Kazazis (1980)。

[25] 念の為に付言すると、福地(1985)他によれば、動詞の前、特に主語の位置は本来無標（unmarked）の主題（theme）の位置であるが、主語以外の要素が文頭に置かれると有標（marked）の主題となる。なおここで付け加えると、筆者の考察は、無標の主題は文においてより「前方」、焦点はより「後

pe　　ţarani.

(prep.)　peasant-df.pl.

「私は彼に、農民たちを苦しめない様に忠告した」

(81) Pe　　Giskra　îl　　cunosc　　de mult,　rosteşte　Farmă.

(prep.)　Giskra 3.m.sg.acc. know-sg.1 very much　utter-sg.3 Farma

「ジスクラならよく知っているとファルマが言う」

方」に位置するという基本的な談話構造の理論に従っている。

2.1.4.先行研究における問題点

Buchholz (1968)による重叙条件の分類は、現在でも大部分の文例に適合するし、実際実用的でもある。重叙条件を殆ど全部列挙したのはその事情による。然しこの分析は個別の文脈に依存する条件を排除したものであり、重叙によって個々の文にどの様な効果が現れるかという問題には余りにも言及が不足している[26]。その為、幾つかの文例を、現実に存在するにもかかわらず規則違反の例外として残す結果となっている。又、重叙が任意であるとされる場合、重叙する文としない文とでは、現実にどちらがどの程度用いられるのかという使用頻度の問題にも残念ながら触れていない。

定・不定という形式上の区別に特定・不特定という意味上の区別を加えることで、Buchholz (1968)に対して修正を試みたのが Kazazis/Pentheroudakis (1976)である[27]。先行文脈を意識している点は注目される。然し、特定の文例に対する部分的な考察であり、独自の視点で規則を提示している訳ではない。

林 (1990)もよって立つ所は「文脈」である。勿論、ルーマニア語の pe に相当する前置詞や、目的語が人間を指すもの（[＋human]）かそうでない（[－human]）かによる条件の差異はアルバニア語にはない。さらに、不定直接目的語の重叙がルーマニア語では普通とされるので、ルーマニア語に於ける重叙表現の問題をアルバニア語にそのまま適用することは出来ない。然し、重叙表現が文脈に積極的な役割を与えていることを詳細且つ具体的に説明している点、間接目的語が直接目的語より容易に重叙条件を満たすと考えている点等､アルバニア語の問題にも通じる指摘が見られる。

又、定・不定の形式については、便宜上「既知」対「未知」或いは「旧情報」対「新情報」といった大雑把な区別が行われがちだが、Berent (1977)に於けるマケドニア語の例や、前節でまとめた定形／不定形の条件では、

---

[26] Buchholz ら以前に文脈の関与を指摘しているのは､筆者の確認した限りチェコの Novák (1958, 1959)のみであるが､個別言語の例は示されておらず､「主題（thema）－題述（rhema）」関係と句構造の関わりについて一般的に触れるに留まっている。

[27] 後に Buchholz (1987)も文例(18)及び(19)等については妥当であるとし、改めて分類している。

名詞に後置される附加語の内容によって定形語尾を取る場合もあり、定／不定の形式の区別が必ずしも先行文脈次第ではないことを示している。ただし、Berent の「特定」に関する名称の区別（specific と specified）は、ここでは余り重要でないと筆者は考える。

2.1.5.問題点の解明

2.1.5.1.テクストの分類とその結果

ここでは *Historia 4* を主なテクストとして単文内の重叙例を実際に分析してみよう。

まず①各文中で直接目的語（句・節）と間接目的語（句・節）を含むものを取り出し、②弱形代名詞による重叙の有無、③定形語尾の有無、④動詞との位置関係、⑤代名詞か否か、の各条件で分類した。人称代名詞，関係代名詞，不定代名詞，疑問代名詞は代名詞として分類した。関係代名詞節以外の補文節を受けるものについてはひとまず不定形のグループに含めてある。現代語の複数与格は定形語尾の有無にかかわらず同形なので、2.1.3.1.2.で述べた定・不定の条件に従って定／不定を区別したが、付加語もなく不明確なものは不定形扱いとした。

表 10

（直接目的語の場合）

目的語が動詞の前

	重叙するもの	重叙しないもの	計
普通名詞不定形	11 (92%)	1 (8%)	12
普通名詞定形	26 (93%)	1 (7%)	27
代名詞	27 (87%)	4 (13%)	31
計	64 (91%)	6 (9%)	70

表 11

（直接目的語の場合）

目的語が動詞の後

	重叙するもの	重叙しないもの	計
普通名詞不定形	23 (74%)	8 (26%)	31
普通名詞定形	220 (80%)	55 (20%)	275
代名詞	31 (100%)	0 (0%)	31
計	274 (81%)	63 (19%)	337

表 12

（間接目的語の場合）

目的語が動詞の前

	重叙するもの	重叙しないもの	計
普通名詞不定形	1 (100%)	0 (0%)	1
普通名詞定形	9 (100%)	0 (0%)	9
代名詞	9 (100%)	0 (0%)	9
計	19 (100%)	0 (0%)	19

表 13

（間接目的語の場合）

目的語が動詞の後

	重叙するもの	重叙しないもの	計
普通名詞不定形	6 (86%)	1 (14%)	7
普通名詞定形	119 (100%)	0 (0%)	119
代名詞	15 (100%)	0 (0%)	15
計	140 (99%)	1 (1%)	141

（以上、比率は各行毎の計算による）

2.1.5.2.テクストに関する考察

2.1.5.2.1. 直接目的語

先ず基本的な重叙条件から外れている文例について検討する（文例のページ数は特に出典を示さない限り *Historia 4*）。

2.1.5.2.1.1. 動詞の前で重叙しない定形

次の１例のみ。

(82) Populli i mposhti armiqtë me
people-df.sg.nom. 3.pl.acc. defeat-aor.sg.3 enemy-df.pl.acc.with
Luftën e vet Antifashiste Nacionalçlirimtare, por
war-df.sg.acc. own antifascist natinalliberation but
ai e dinte se ujku
he 3.sg.acc. know-impf.sg.3 that wolf-df.sg.nom.

qimen ø ndërron, por jo zakonin.
hair-df.sg.acc. change-sg.3 but not habit-df.sg.acc.
「人民は敵を自らの民族解放の戦いで圧倒したが、狼が毛皮を変えても習性を変えないとわかっていた」(P.133)

ここで ujk「狼」は armik「敵」の言い換えである。従って qime「毛」も、特定の狼の毛を指していないのは明らかである。つまり総称の定形と言えるが、それだけでは重叙を伴わないことへの説明にならない。

この場合、se 以下は諺か決まり文句の一種と考えられる[28]。その様な類の文は簡潔な言い回しを好むので qimen を敢えて重叙させず、後の zakonin と対比を示す様な文体にしていると考えられる。

2.1.5.2.1.2. 動詞の前で重叙しない代名詞

4 例中 3 例は、関係代名詞 që を含む関係節の文例であった[29]。関係代名

---

[28] これが定まった「諺」かどうかについてであるが、例えば現代ギリシア語にも次の様な言い回しが諺とされていることからも、アルバニア語でも慣用されていると考えてよいだろう（浮田 1989: 12)。
ο λύκος κι αν εγήρασε κι άλλαξε το μαλλί του,
the wolf and if age-aor.sg.3 and change-aor.sg.3 the hair 3.m.sg.gen.
μήτε τη γνώμη άλλαξε, μήτε την κεφαλή του.
nor the thought change-aor.sg.3 nor the head 3.m.sg.gen.
「狼は老いて毛が変わったが自分の考え方も頭（の中身）も変えなかった」

[29] 本節の対象外ではあるが、që の関係節内で重叙が起こる例は合計 10 例で、いずれも直接目的語としてである。一例をあげておく；
…njerëzit … mësuan të bënin vegla
man-df.pl.nom. learn-aor.pl.3 make-subj.impf.pl.3 tool-indf.pl.acc.
pune, që vazhdimisht i përmirësonin.
work-indf.pl.abl. rel.pron. continuously 3.pl.acc. improve-impf.pl.3
「(前略）人間は（中略）仕事の道具を作る事を覚え、それを絶えず改良

詞が関係節内の動詞に先行するのは当然である。

(83) Populli ynë, ...realizoi me nder edhe
people-df.sg.nom. our realize-aor.sg.3 with honour and
detyrat <u>që</u> ø caktoi Kongresi
obligation-df.pl.acc. rel.pron. decide-aor.sg.3 congress-df.sg.nom.
「我が人民は（中略）会議が（<u>それを</u>）決定したところの責務も誇りと共に果たした」(P.138)

1 例は疑問文であるが、実は疑問代名詞が重叙する例は 1 つもない。

(84) <u>Ç</u>' ø dini ju për Kongresin e 9-të?
what know-pl.2 you about congress-df.sg.acc. ninth
「第 9 回会議について<u>何を</u>知っていますか？」(P.142)

2.1.5.2.1.3. 動詞の後で重叙する不定形

23 文例中、指示代名詞による限定を受けたものが 6 例、属格や形容詞による限定を受けたものが 6 例､全く附加語を伴わないものが 1 例であった。この最後の例を挙げる。

(85) Nënave u rrëmbenin nga duart
mother-df.pl.dat. 3.pl.dat. grab-impf.pl.3 from hand-df.pl.nom.
djemtë e vegjël e i dërgonin në
boy-df.pl.acc. little and 3.pl.acc. send-impf.pl.3 in
Turqi, u ndërronin emrin,
Turky-indf.acc. 3.pl.dat. change-impf.pl.3 name-df.pl.acc.
i stërvitnin, <u>i</u> vishnin <u>ushtarë</u>.
3.pl.acc. train-impf.pl.3 3.pl.acc. dress-impf.pl.3 soldier-indf.pl.acc.

していた」(P.3)

一方 i cili によるものは 9 例であったが、1.3.6.4.での予想通り、全てが重叙を伴っていた。

「彼等は母親の手から男児をさらってトルコに連れて行き、その名前を変え、訓練し、兵士達を着飾らせていた」(P.23)

これはオスマン・トルコの軍隊がアルバニア人の子供を徴兵する場面の説明である。前半部から考えると、ushtarë「兵士達」は結局 djemtë e vegjël「男児」の言い換えであり、単語としては初出だが、文脈上は既知の存在だと言える。従って、読み手にとり純粋に新しい情報ではない。

残る 10 例は全て se か që で始まる副文節を指示代名詞で受ける重叙であった。この時動詞は全て di「知っている」, kuptoj「理解する」, shoh「見せる」, tregoj「示す」
の何れかであった。di を用いた例を示す。

(86) Skënderbeu e dinte se për
Skanderbeg-df.nom. 3.sg.acc. know-impf.sg.3 that for
ruajtjen e lirisë duhej
safeguard-df.sg.acc. freedom-df.sg.gen. must-impf.sg.3
të bëheshin shumë përgatitje.
make-med.impf.subj.pl.3 many preparation-indf.pl.nom.

「スカンデルベグは、自由を守るために多くの準備が必要だということを知っていた」(P.26)

重叙を伴わない se の節もあるが、この場合動詞は them「言う」等である。次の例は他のテクストからのものである。

(87) Më kanë thënë se je shumë i mençur.
1.sg.acc. say-pf.pl.3 that be-sg.2 very clever
「皆わしに、おまえがたいそう賢いと言っておる」(Kostallari 1989: 162)

「言う」動詞については、少なくとも「言う相手」は目的語として必要であろうが、「言った内容」は常に必要ではなく（勿論上例の様に『内容』が新情報として伝達価値を持つ場合は se 節で導かれる)、目的語としての結び付きが弱いのではないかと考えられる。これに対して、「知ってい」た

り「理解する」場合、「相手」は必要不可欠ではないが、内容が明示されなければ、その文が何を伝えようとしているのか判らず、不自然である。いずれにしても、(文脈の上で)動詞によって示される内容が目的語として必須の場合は、動詞に重叙代名詞を前置する。

2.1.5.2.1.4. 動詞の前で重叙しない不定形

この条件は先行研究に従えば任意のはずだが、動詞の前で重叙する不定形が 11 例あるのに対し、僅か 1 例しかない。

(88) Ç' masa ø ka marrë Partia jonë
what way-indf.pl.acc. take-pf.sg.3 party-df.sg.nom. our
për ta përjetësuar këtë ngjarje të rëndësishme?
for particle+3.sg.acc. survive-part. this accident-indf.sg.acc. difficult
「この困難な事態を乗り切るために、我が党はどんな方策を講じたか」(P.55)

しかもこれは疑問詞で始まる疑問文である。2.1.5.2.1.2.で述べた様に、この場合も重叙を伴うことはない。「方策」が具体的に何であるかは不明であり、特定不可能である。強いて分類するなら、少なくとも旧情報ではない。一方、答として出される「方策」は問うた側にとっては新情報となろう。何れにせよ、これだけの文例では、「動詞の前の不定形は重叙してもしなくても構わない」とは到底言えない。

2.1.5.2.1.5. 重叙条件の再整理

ここまで見て来ると、アルバニア語の直接目的語では積極的に重叙を伴う傾向があり、むしろ重叙を伴わない文例についてその理由を考えた方が相応しい様に思われる。そこで 2.1.3.1.2.の I で示した定形名詞の条件を踏まえて、重叙条件を改めて整理してみる。

A　重叙を伴う目的語は定・不定を問わず何等かの形で既知である。特に目的語が自然な語順で本来の主語の位置に来る時は、有標の主題として常

に重叙する。

B　重叙を伴わない目的語は、疑問文の場合等を除き普通動詞の後に置かれる。これをさらに名詞の定・不定によって分ける。

B-1　重叙を伴わない名詞不定形は、指示代名詞に限定された場合を除き、新情報である。疑問代名詞は「未知」の指示物なので、ここに属する。

B-2　重叙を伴わない名詞定形や、指示代名詞に限定された名詞不定形は、さらに次の様に分ける。

B-2-1　先行文脈で述べられている旧情報だが、単独で置かれることによって、あたかも新情報の様に文脈の中から浮かび上がり、聴き手の注意を喚起する。2.1.3.1.2.のＩにおける(a)がこれに相当する（以下アルファベットのみ示す）。

B-2-2　実質上は先行文脈で述べられているが、別の語で言い換えられている旧情報で、B-2-1 の様に新情報の如く扱われる。(b)。

B-2-3　先行文脈では全く述べられていないが、言外の情報から指示対象を判別できるもの。やはり新情報の如く扱われる。(c) (d)。又、人称代名詞もこの部類に属する。

B-2-4　親族名称や固有名詞。言外知識に依存する点で B-2-3 に近いが、より特殊なもの。(e) (g) (h)。

以上の４項目は新情報に擬した旧情報で、非重叙による文脈上の効果は結局 B-2-1 と同じである。

B-2-5　一般化や総称としての定形で、新情報であるもの。(i)。

B-2-6　附加語による限定で定形語尾を取っていたり、指示物の所有主が文脈から明らかであるが、上の４項目に見られる様な旧情報の読みを全く持たない場合。これは事実上新情報である。(j) (k)。

以上の６項目は、実際に新情報か、又はその様に扱われる旧情報である。尚該当しないものは次のグループに入る。

B-2-7　慣用による省略等。(l)。諺やスローガン、新聞の見出し記事[30]に於

---

[30] 次の様な例が典型的である。固有名詞は読者にとってよく知られたものであり、文も必要最小限の単語で構成されている。

ける文の単純化がこれに属する。

以上の様に 2.1.3.1.2.の条件を当てはめていくと(f)と(m)が残るが、(f)の内容は目的語には関係がない。また、(m)は上に挙げた分類の何れにも入り得る。

以上の条件を基に、今度は重叙を伴わない文例を検討する。

2.1.5.2.1.6. 動詞の後で重叙しない不定形

８例あるが、いずれも明らかに文脈上初出の新情報である。２例を挙げる。

(89) ø Bëni vizitë në muzeun e qytetit
do-pl.2 visit-indf.ag.acc. into museum-df.sg.acc. city-df.sg.gen.
a krahinës tuaj ose në një vendbanim
or province-df.sg.gen. your or into one residence-indf.sg.acc.
të vjetër që ndodhet afër. Pas vizitës
old rel.pron. occur-med.sg.3 nearby after visit-df.sg.abl.
ø zhvilloni në klasë, një bisedë për
develop-pl.2 in class-indf.ag.acc. one conversation-indf.ag.acc. about
paraardhësit tanë, ilirët.
ancestor-df.sg.abl. our Illyrian-df.pl.nom.

「君たちの街や地区の博物館、或いは近くの古い住居を見学しなさい。見学の後、クラスで私たちの先祖であるイリュリア人について話し合いをしなさい」(P.11)

これは学習課題文の１つで、前後の文脈からは完全に独立している。つまり「見学」や「話し合い」という指示は読み手（生徒）にとって新しく、

Ushtria serbe ø sulmon Dubrovnikun
army-df.sg.nom. Serbian attack-sg.3 Dubrovnik-df.acc.
「セルビア軍ドゥブロヴニク攻撃」(*Zëri i Popullit* 19.10.1991)

注意を喚起すべき情報と言える。

2.1.5.2.1.7. 動詞の後で重叙しない定形

この文例数は 55 で、重叙する文例数 220 に比べると 4 分の 1 であり、全体から見ても軽視出来ない。6 文例を挙げる。

(90) Ndodhte që të prodhonin më shumë nga
happen-impf.sg.3 that increase-med.impf.pl.3 more than
sa kishte nevojë fisi.
how much have-impf.sg.3 necessity-indf.sg.acc. tribe-df.sg.nom.
Pra, kishte teprica, të cilat
therefore have-impf.sg.3 rest-indf.pl.acc. rel.pron.f.pl.acc.
filluan t'i përvetësonin
begin-aor.pl.3 particle+3.pl.acc. assimilate-impf.subj.pl.3
udhëheqësit e gjinive e të fiseve.
leader-df.pl.nom. kinship-df.pl.gen. and tribe-df.pl.gen.
Këta përvetësonin edhe veglat e punës e
they assimilate-impf.pl.3 and tool-df.pl.acc. work-df.sg.gen. and
bagëtinë e të tjerëve.
livestock-df.sg.acc. and others
...Siç thamë më lart, kur udhëheqësit e fiseve
as say-aor.pl.1 before when leader-df.pl.nom. tribe-df.pl.gen.
filluan të ø përvetësonin <u>tepricat</u> e
begin-aor.pl.3 assimilate-impf.subj.pl.3 rest-df.pl.acc. and
t'u ø rrëmbenin edhe anëtarëve të tjerë
particle+3.pl.dat. rob-impf.pl.3 and member-df.pl.dat. other
<u>veglat e punës e bagëtinë</u> e
tool-df.pl.acc. work-df.sg.gen. and livestock-df.sg.acc. and
t'i bënin të tyret, filloi pabarazia.
particle+3.pl.acc. make-impf.subj.pl.3 them begin-aor.sg.3 inequality-df.sg.nom

「部族で必要とする以上のものが生産される様になった。これによって余剰な分が出来た。それを集め始めたのは一家や部族の指導者達だった。彼らは他人の道具や家畜までも集めていった。（中略）前に言った様に、部族の長が余剰分を集め、他の者たちの道具や食糧を没収し、それを利用し始めた時から不平等が始まった」(P.8～12)

前半部と後半部には数ページの距離があり、その間に他の様々な事項が記述されるので、「余剰分」「道具」「食糧」は完全に旧情報の中に埋もれてしまう。この旧情報を新鮮な形で文脈から浮き上がらせ、「不平等」という事項を説明するための重要な要素であることを改めて示すために、重叙がない。これは 2.1.5.2.1.5.で挙げた条件の B-2-1 に相当する。

(91) Edhe kur hordhitë romake arrinin
and when horde-df.pl.nom. Roman arrive-impf.pl.3
të futeshin thellë në tokat e tyre,
put in-med.impf.subj.pl.3 deeply in land-df.pl.acc. their
ilirët tërhiqeshin në zonat
Illyrian-df.pl.nom. pull-med.impf.pl.3 in area-df.pl.acc.
malore, mblidhnin forca e
mountainous gather-impf.pl.3 force-indf.pl.acc. and
prej andej vërsuleshin përsëri mbi armiqtë.
from over there throw-med.impf.pl.3 again on enemy-df.pl.acc.
Ilirët dinin të shfrytëzonin mjaft mirë
Illyrian-df.pl.nom. know-impf.pl.3 use-impf.subj.pl.3 enough well
terrenin e vendit, malet,
ground-df.sg.acc. land-df.sg.gen. mountain-df.pl.acc.
grykat e luginat e thella, sulmonin si
pass-df.pl.acc. and valleydf.pl.acc. deep attack-impf.pl.3 as
rrufe e tërhiqeshin shpejt...
thunderbolt-indf.pl.nom. and pull-med.impf.pl.3 fast

Megjithëse e pushtuan Ilirinë,
although 3.sg.acc. occupy-aor.pl.3 Illyria-df.acc.
romakët nuk mundën të ø thyenin
Roman-df.pl.nom. not can-aor.pl.3 crush-impf.subj.pl.3
qëndresën e ilirëve.
resistance-df.sg.acc. Illyrian-df.pl.gen.

「ローマ人の軍団がこの地へ侵入するために到着すると、イリュリア人たちは山岳地帯に隠れ、そこから戦力を結集して再度敵に襲いかかった。イリュリア人たちは、平地や山々や峠や深い谷を充分に利用することを知っており、電光石火で攻撃した

（中略）

イリュリアを占領したものの、ローマ人達に破壊出来なかったのが、イリュリア人たちの抵抗であった」(P.17)

最後の qëndresën e ilirëve「イリュリア人たちの抵抗」という語は先行文脈に出て来ない。然し、抵抗の具体的内容は充分に例示されており、qëndresë というただ一つの語句で置き換えられたのである。従って事実上旧情報であり、尚且つ読み手に「抵抗」への注意を引き付ける為重叙していない。これは B-2-2 に相当する。尚、後半部の Ilirinë「イリュリアを」も旧情報だが、こちらは定形で重叙を伴っている。この点から見ても、romakët nuk mundën të thyenin qëndresën e ilirëve は右方により比重を置いた特殊な文脈である。

(92) Për t'i bashkuar komunistët
for particle+3.pl.acc. unite-part. communist-df.pl.acc.
e për t'i hedhur në luftë
and for particle+3.pl.acc. throw-part. in war-indf.sg.acc.
dhe për të ø formuar Partinë Komuniste,
and for (particle) form-part. party-df.sg.acc. communist

ka bërë një punë shumë të madhe shoku Enver Hoxha[31],...
do-pf.sg.3 one work-indf.sg.acc. very big comrade-df.sg.nom.

「共産主義者を団結させ、戦争に彼等を投入し、共産党を結成する為に立派な仕事をしたのが、エンヴェル・ホヂャ同志であった（後略）」(P.75)

ここで Partinë Komuniste「共産党を」を新情報と見做しても特に問題はない様にも見える。しかし、このテクストがアルバニア社会主義人民共和国（当時）の出版物で、同国市民を読者に想定しているという言外情報を考え合わせると、これは旧情報の一種であり、B-2-3 に相当する。

(93) Pushtuesit u tmerruan nga ky
occupier-df.pl.nom. horrify-med.aor.pl.3 by this
aksion dhe ø lajmëruan me të shpejtë Romën,
action-indf.sg.nom. and inform-aor.pl.3 with quickness Rome-df.acc.
se në Shqipëri nuk e ndienin
that in Albania-indf.sg.acc. not 3.sg.acc. feel-impf.pl.3
veten të sigurit.
oneself-sg.acc. security-df.sg.gen.

「支配者はこの運動に恐れおののき、急いでローマに、アルバニアでは身の安全を感じられないと知らせた」(P.81)

ここで固有の地名「ローマ」は B-2-4 の条件に相当する。「知らせた」先が他ならぬローマである、という文脈になっている。

(94) Ato ø sulmonin autokolonat e armikut
3.m.pl.nom. attack-impf.pl.3 colony-df.pl.acc. enemy-df.sg.gen.
që transportonin ushtarë e
rel.pron. transport-impf.pl.3 soldier-indf.pl.acc. and

[31] アルバニア語の人名がしばしば定形となることは既に述べたが、この様に肩書や称号が前置される場合、そちらの方に定形語尾が移り、固有名詞そのものは不定形となる。

materiale lufte, ø goditnin në befasi
material-indf.pl.acc. military hit-impf.pl.3 in sudden-indf.sg.acc.
forcat dhe bazat ushtarake të armikut,
force-df.pl.acc. and base-df.pl.acc. military enemy-df.sg.gen.
ø shkatërronin vijat telegrafonike, ø hapnin
break-impf.pl.3 line-df.pl.acc. telegraphic open-impf.pl.3
depot e armikut dhe ua
depot-df.pl.acc. enemy-df.sg.gen. and 3.pl.dat.+3.sg.acc.
kthenin drithin fshatarëve etj.
turn-impf.pl.3 grain-df.sg.acc. peasant-df.pl.dat. etc.

「彼等は、兵と軍事物資を輸送していた敵占領区を攻撃し、敵の部隊と軍事基地を急襲し、電話線を切断し、敵の倉庫を開放し、農民に穀物等を回していった」(P.86)

「敵占領区」も「敵の部隊と軍事基地」も「電話線」も「敵の倉庫」も（関係節などによって限定されるなどの理由で）定形だが、重叙はせず、新情報としての扱いを受けている。ただここで「敵」が何を指しているかはテクスト全体に於いて明らか（ドイツ軍）である。これは B-2-6 の条件を満たす。

なお、後半部の drithin「穀物を」は前出 depot の「部分」を成すものと解釈できる。つまり旧情報であり、特に注意を喚起する理由もないから重叙していると考えられる。

(95) Partia e mësonte popullin
party-df.sg.nom. 3.sg.acc. teach-impf.sg.3 people-df.sg.acc.
që të ø mbante në një dorë
that (particle) hold-impf.sg.3 in one hand-indf.sg.acc.
kazmën dhe në tjetrën pushkën, për të
pickaxe-df.sg.acc. and in another rifle-df.sg.acc. for (particle)
dërrmuar të gjithë armiqtë...
crush-part. all enemy-df.pl.acc.

「党が人民に教えたのは、敵を粉砕する為に、片手につるはしを、片手に銃を持てということだった（後略）」(P.117)

これは、文例(82)や後出の文例(97)と同様、簡潔が好まれるスローガンの一種である。në një dorë kazmën dhe në tjetrën pushkën「片手につるはし、片手に銃」の部分がそれにあたる。B-2-7 に相当する。

その他を含めて 55 文例が、上で述べた条件の何れかによって説明出来る。B-2-5 に相当する文例はこのテクストには見出されない。

2.1.5.2.2. 間接目的語

重叙を伴わない間接目的語の文例は１つしかなかった。実際の所これは５つあるのだが、全部同じ文である。

(96) Ushtrimi 1: ø Përgjigjuni këtyre pyetjeve:
exercise answer-pl.2 this-f.pl.dat. question-indf.pl.dat.
「練習１　次の問いに答えなさい」(P.18 他)

これは生徒に対する問題文の冒頭部である。この「問い」には、まだ示されていない未知の内容を示す指示代名詞「次の」が付されており、新情報であるから重叙が起こっていない、と考えられる。

一方、次の文例(97)は、呼掛けとして単純化された文体である可能性が高い。

(97) Vdekje fashizmit, liri popullit!
death-indf.sg.acc. fascism-df.sg.dat. freedom-indf.sg.acc. people-df.sg.dat.
「ファシズムに死を、人民に自由を」(Kostallari 1989: 253)

この様なスローガンの類は 2.1.5.2.1.1.の場合と同様簡潔な表現が好まれるから、本来必須であるべき重叙が敢えて避けられていると言えよう[32]。

この２文例を除けば、如何なる文脈でも間接目的語は重叙を伴っている

[32] そもそも重叙は動詞との関連で起こるものであるから、こうした例を考察の対象に入れるべきでないというのは Fiedler（1989）らの見解である。

が、これは文脈のレヴェルで考えても当然のことと思われる。というのは、直接目的語に対する間接目的語、即ち与格は殆ど常に既知の話題、即ち旧情報として現れ、従って 2.1.5.2.1.5.で述べた条件から重叙を伴うからである。

2.1.5.3.まとめ

2.1.4.で先行論文を踏まえて問題点を挙げ、2.1.5.1.及び 2.1.5.2.で具体的な考察を行った。以下に本節の結論を述べる。

第一に、アルバニア語の単文における重叙表現は文脈内で特に力点を置いたり強調の意味合いを持たせるようなものではなく、目的語を伴う動詞は弱形を伴う方がむしろ普通である様に見える。この点、「弱形人称代名詞をとることで、他動詞は何か一種の落ちつきを得るといったようなところがある」（関本 1976）傾向がアルバニア語ではかなり強いと考えられる。

第二に、上で述べたことから、重叙を伴わない目的語は文脈内における「有標性」の度がより高い。即ち、新情報である語は重叙せず、動詞の後に置かれて文の焦点となるが、例え旧情報であると思われる語でも、聴き手の注意を促すために重叙せず、動詞の後で新情報の様に振舞う。そしてこの場合、重叙を伴って動詞の後に置かれた場合よりも目的語に一層比重をかけた、特殊な文脈となる。注意すべきは、目的語となる名詞が定形語尾を取るか不定形語尾を取るかということよりも、先行する文脈でその語を示す同一の語、或いは別の語で言い換えられたものがあるかどうかということの方が、判別の最初の手懸かりになっている点である。

2.1.5.2.1.5.で示した重叙条件については、一部かなり細分化してあるが、全ての条件は、上で述べた目的語に対する注意の払い方に従っている。

2.2.補文構造における重叙表現

2.1.ではアルバニア語の単文に限って重叙の傾向を分析した。そこでは文脈や談話情報と重叙の関係など、機能統語論[33]の観点からの分析が主であり、それはおおむね有効なものであった。

こうした形のアプローチは、関係節などの補文の内部における代名詞重叙の傾向にも適用可能ではないかと筆者は考えるが、(後述するように)アルバニア語やバルカン諸語の補文構造に対象を絞って行われた同種の研究が皆無に近い以上、いきなりにこれを進めるわけにはいかないだろう。つまり、少なくとも他言語における補文化と、もし存在するならば代名詞重叙、またはそれに類する現象をあらかじめ確認し、それらとの類似点・相違点を念頭に置きながら、あらためてアルバニア語の例を調べるのが賢明な手順ではないかと思われるのである。

従ってここからは類型統語論の研究成果をより積極的に導入して、補文と重叙の関係を分析する。

2.2.1.先行研究

2.1.1.では、世界の諸言語に見られる重叙表現を単文の場合に限って示した。ここでは、関係節[34]などの補文構造でも同じような例が見られること

---

[33] 「機能統語論」という用語を使うにあたっては、機能主義と統語論に関する次の既述を念頭に置いていることを念の為付言しておく。

> 「**形式主義**（Formalism）［中略］は、文法、つまり統語論を中心に据え、統語論を言語の意味やその使用に係わる意味論、語用論とは独立した部門として捉える。そして、言語の規則性や普遍性は、文法規則のみによって捉えられると考える**自立的統語論**（autonomous syntax）の立場を取っている。［中略］生成（変形）文法の GB 理論は、このような立場に属する文法理論のひとつである。このような形式主義に対し、もうひとつの立場は、それぞれの構文が持つ諸特性を言語使用の側面から捉え、言語の意味や機能、人間の認知や知覚など、文法に外在的な要因に基づいて説明しようとする立場である。このような立場は**機能主義**（Functionalism）と呼ばれ、言語の統語構造やその諸特性が、言語使用に係わる様々な概念と相互に連関しあい、前者は後者の反映として捉えられると考えている」
> （高見　1999: 138）［括弧・傍線井浦］

[34]制限節と非制限節の形式的区別があるものでは、制限節を一応の考察対象としている。非制限節については Givón（1990: 680ff.）。

を、代表的な先行研究に拠って例示すると共に、それらの先行研究の着眼点についても考察する。

2.2.1.1.Givón（1984, 1990）による補文構造の類型論的分析

Givón（1984）の続巻である Givón（1990）中では、考察の対象をより複雑な構文に拡張し、類型論の観点から考察を行っている。本研究と関連して興味深いのは、様々な言語の関係節構造にはいくつかの「方略（strategy）」が見られるとして、これを分類している点である。その中にはアルバニア語や他の印欧語には一見無関係な構文も含まれるが、2.2.3.以降で行うアルバニア語補文構造の分析には有益なものも多いと考えられるので、ここで細かく見ておこう。（以下、特に示さない限り文例は Givón 1990: 651-680 による。本文下の語釈は若干書き改めている。日本語訳および下線は筆者）

2.2.1.1.1.非埋め込み方略（non-embedding strategy）

ある名詞句にそれを修飾するような文や節を付け加える場合、最も単純な方法は、その文や節をそのまま名詞句の前方または後方（多くは後方）に置くことである[35]。

英語では、次の２例のうち(2)の方がこれにあたる。

(1) The man you met yesterday is a crook.「君が昨日会った男はいかさま師だ」

(2) …well, that man is a crook, y'know, like, you met him yesterday, right?

「…あのね、あの男はいかさま師だよ、君が昨日(その彼に)会ったのは、ね、そうだろう？」

例(2)では that man を you met him yesterday が後方から修飾している。このような方法は、例(1)のように関係代名詞などを用いて主文の中に修飾節

[35] 前方に置かれる例は以後考察対象にはならないが、念のため例を示す。
…well, that, uh, you met that guy yesterday, y'know? Well, I tell you, he sure is a crook…
「…あのね、その、いや、君その男に昨日会ったんだってね？いや、言っておくがね、そいつはいかさま師だよ」

[36]を統語的（syntactic）に埋め込む（embedding）方法[37]と異なり、単に並列的（paratactic）に文の中に置いたに過ぎない、と言える。

また Givón は、ニジェール・コンゴ諸語に属する Bambara に非埋め込み方略の傾向が多く見られることを示している。

(3) n ye o ye, cę min ye muru san
I PAST him see man REL PAST knife buy
「私はナイフを買った男を見た」（lit.『私は彼を、ナイフを買った男を見た』）

この例では、「ナイフを買った男」を「見た」の目的語の位置に埋め込むのではなく、まず「私は彼を見た」と発話し、「彼」を修飾する min 節をそのまま後方に続けている。

2.1.1.1.2.前方照応型代名詞方略（anaphoric pronoun strategy）

ある名詞（句）を修飾する節が、関係詞[38]に導かれて後方に埋め込まれる場合、その名詞句に一致する代名詞が関係節内にあらわれる例がある（このように、先行詞に文法的に一致する要素は coreferent argument と言われる）。この典型的な例が、現代ヘブライ語の関係節構造である。

(4) ha-isha she-ba-a hena etmol…
the-woman REL-came-she here yesterday
「昨日ここに（彼女が）来た女性…」（関係節内で主語）

(5) ha-isha she-Yoav ohev ot[39]-a…

---

[36] 2.2.1.1.3.節のような場合は別として、ここで取り上げている関係節化の例には、単なる関係節（REL-clause）と一括して称するには少々疑問の残る場合もあるので、筆者の判断で modifying subordinate の訳語「修飾［従属］節」を用いる場合がある。なお、この用語自体は Givón も一般論の中で用いている。（1990: 651f.）

[37] つまり、名詞句内に統語的に（多くは後方照応的に）埋め込まれた従属節が関係節である、ということにもなるが、これは一般的な定義に沿ったものと言えるだろうし、実際 Givón もそのように言明している。（1990: 645）

[38] この方略に関する説明で Givón は relative pronoun でなく subordinator morpheme という述語を用いている（1990: 655）。次節で述べる「関係代名詞」そのものと厳密に区別しているものと考えられる。

[39] et または ot（תא）は本来前置詞であるが、定形名詞と共に直接目的語句

the-woman REL-Yoav loves ACC-her

「ヨアヴが（彼女を）愛した女性…」（関係節内で直接目的語）

(6) ha-isha she-Yoav natan l-a et-ha-sefer…

the-woman REL-Yoav gave to-her ACC-the-book

「ヨアヴが（彼女に）本をあげた女性…」（関係節内で間接目的語）

(7) ha-isha she-Yoav saxar et-ha-bayit shel-a…

the-woman REL-Yoav rented ACC-the-house of-her

「ヨアヴが（彼女の）家を借りた女性…」（関係節内で属格）

(8) ha-shulxan she-Yoav yashav al-av…

the table REL-Yoav sat on-it

「ヨアヴが（それの上に）座ったテーブル…」（関係節内で前置詞句）

(4)では、先行詞の名詞 isha「女性」は関係節内で主語の位置を占めているが、そこには isha に照応する代名詞-a「彼女」があらわれている。同様に(5)では直接目的語の位置に、(6)では間接目的語の位置に-a がある。また(7)のように属格の位置でも代名詞-a があらわれ、さらに(8)のように前置詞のあとにも代名詞-av「それ」があらわれている。ヘブライ語ではこのように、前方照応型代名詞が関係節内のあらゆる位置に（必須成分として）あらわれる。

注目すべきは、1.3.3.や 1.3.6 で論じたように、アルバニア語や他のバルカン諸語の関係節にもこれと同じような現象が見られることである。1 章の例文でいうと、アルバニア語では(1)及び(2)、現代ギリシア語では(64)及び(66)、マケドニア語では(70)(71)、ルーマニア語では(72)がこれにあたる。

ただし、アルバニア語ではこのような代名詞は関係節（që や i cili によって導かれる）内の直接目的語または間接目的語の位置にしかあらわれず、また直接目的語の位置においては必須の現象でないなど、ヘブライ語ほど前方照応が徹底して行われるわけではない。

のようにふるまうので、他の前置詞とは一応別の扱いにしている。これは Givón の表記でも同様である。

2.2.1.1.3.関係代名詞方略（relative pronoun strategy）

ここで示すものは前節で述べたものとよく似ているが、節内に前方照応型代名詞があらわれない。その一方で、関係詞の格役割が形態面でより明確に示されるという傾向がある。この特徴が最もよくあらわれている例として、Givón はドイツ語の文をあげている。

(9) der Mann, der kam…

the man that-m.nom. came

「やって来た男は…」

(10) der Mann, den ich schon lange kenne…

the man that-m.acc. I already long know

「私がずっと前から知っている男は…」

(11) der Mann, dem ich das Buch gegeben habe…

the man that-m.dat. I the book given have

「私がその本をあげた男は…」

(12) der Herr, mit dem ich sprach…

the gentleman with that-m.dat. I spoke

「私が話した紳士は…」

このように先行詞の性・数と節内での格役割に応じて関係代名詞が格表示を伴って変化する例は、アルバニア語の i cili や現代ギリシア語の o οποίος と同様である。ただし、前節および 1.3.3.や 1.3.6 で述べたように、アルバニア語の i cili 節で前方照応型代名詞が決して削除され得ないことは注意を要する。

2.2.1.1.4.ギャップ方略（gap strategy）

比較的厳密な語順を持つ言語では、関係節にあたる部分が関係詞、またはそれに類するものをまったく伴わないことがある。この場合、問題となる節は単文においてあるべき位置からそのまま修飾される語句の直前（または直後）に移動しており、読み手（聞き手）はその移動したあとの空隙（gap）の存在によって、主節と修飾句の関係を理解する。典型的なものと

して、Givón は「厳格な SOV 言語」である日本語の例をあげている（原文はローマ字転写）。

(13) 男が 女に 手紙を 書いた（単文）

(14) 女に手紙を書いた 男は…（coreferent argument は関係節内で主語）

(15) 男が女に書いた 手紙は…（coreferent argument は関係節内で直接目的語）

(16) 男が手紙を書いた 女は…（coreferent argument は関係節内で間接目的語）[40]

Givón は同様の例として、アラワク語に属するペルーの Asheninka の例もあげている。この言語では、文中の名詞に照応する代名詞を常に動詞が伴っているという、一見バルカン諸語の重叙代名詞にも似た特徴をもつが、興味深いのは、その中の名詞句が先行詞として前方に移動する際、その名詞句に照応する代名詞が、後方の修飾節に残った動詞（関係詞に類する形態素が付加される）から削除されることである。

(17) i-p-ak-e-na-ro kaniri syiraNpari（単文）

3.m.-give-PERF-REAL-1.-3.f. manioc man

「男は（彼は）私にマニオク（キャサバ芋）を（それを）くれた」

(18) syiraNpari p-ak-e-na-ro-ri kaniri

man give-PERF-REAL-1.-3.f.-REL manioc

「私にマニオクを（それを）くれた男」

(19) kaniri i-p-ak-e-na -ri syiraNpari

manioc 3.m.-give-PERF-REAL-1.-REL man

「男が（彼が）私にくれたマニオク」

[40] Givón はこの例で格助詞の「が」と「は」にそれぞれ SUBJ、TOP と注記している（1990: 659）。これは subject marker と topicalizer として区分していると考えられるが、母語話者の感覚からするといささか区分が単純すぎるように思われる。しかしここでは単文節の例と関係節化した例の違いを明確にする意味もあると思われ、また本論の問題とは直接関わってこないので、原文のままとする。

(18)では syiraNpari に照応する代名詞 i-が、また(19)では kaniri に照応する代名詞-ro が動詞から脱落していることがわかる。

さらに Givón はこれと逆の傾向が見られる言語として、ペルーの Bora の例に言及している。この言語には関係詞に類する形態素がまったく見られないが、修飾節内の動詞に、先行詞として前方移動した名詞句に照応する代名詞が coreferent argument として付加される。

(20) walle　　oohîîbye-ke　picyôô　　mêêtsá-wá　hallú-vu
woman/SUBJ　dog-OBJ　　put-PERF table-CL/POSS　top-to
「女は犬をテーブルの上に置いた」

(21) oohîîbye　　walle　　mêêtsá-wá　　hallú-vu　picyôô-be　úmivá
dog　　woman/SUBJ　table-CL/POSS　top-to　　put-it/CL　flee/PERF
「女がテーブルの上に（それを）置いた犬は逃げ出した」

語順と格表示マーカーによって oohîîbye が先行詞、それに続く walle ..... picyôô-be が修飾節となる。このことは、次の例(22)でも確かめることができる。この例では、先行詞 oohîîbye は文全体の中で目的語として機能しているが、目的格表示のマーカーは oohîîbye にでなく、修飾節の末尾の動詞 picyôô につく。このことによって oohîîbye ..... picyôô-be-ke 全体が ó ájotyumí-hi の目的語となっていることがわかる。

(22) oohîîbye　walle　　mêêtsá-wá　　hallú-vu　picyôô-be-ke
dog　　woman/SUBJ　table-CL/POSS　top-to　　put-it/CL-OBJ
ó　ájotyumí-hi
I　see/PERF-INF
「女がテーブルの上に（それを）置いた犬を私は見た」

語順の違いを別にすれば、例(21)(22)における-be は動詞と密接に結びつくことで、ちょうどアルバニア語の関係節内における重叙代名詞と似たような機能を持っているのではないかと思われる。

2.2.1.1.5.語順方略（word-order strategy）

前節で述べたような、修飾節が関係詞に類するものを伴わずに移動する関係節化は、関係詞を持つ言語には見られないわけでもない。例えば英語にも、非標準的な用法ではあるが、同様の例が見られるという。

(23) The guy married my sister is a crook.

「妹と結婚した男はいかさま師だ」

(24) The book John read is terrific.

「ジョンが読んだ本はすごく面白かった」

この場合、英語の厳密な SVO の語順から逸脱していることがそのまま修飾節の存在を示していることになる。特に(24)の場合、NP-NP-V という語順が本来あるべき NP-V-NP の構造と明らかに異なっているため、一つ目の NP である the book が先行詞の役割を持つことが即座に判別できる。

2.2.1.1.6.名詞化方略（nominalization strategy）

Givón は主にトルコ語の例をあげている[41]が、これは修飾節の動詞を名詞化して名詞句に前置するものである。この時、修飾節内で主語の役割を果たす名詞句は属格の格表示を持ち、名詞化した動詞と共に名詞句を修飾する。

(25) adam ev-i gör-dü

man house-ACC see-PAST

「男は家を見た」

(26) ev-i gör-en adam

house-ACC see-S/NOM man

「家を見た男」（lit.『家を見るの男』）

(27)adam-nin gör-düğ-u ev

man-GEN see-O/NOM-3.sg.POSS house

「男が見た家」（lit.『男の（彼の）見ることの家』）[42]

---

[41] 他に中米の Ute の例をあげている（1990: 664-664）。

[42] 例(27)は「男の見た家」とも言えるので、日本語の関係節化にこの方略との類似性を見ることもできるかも知れないが、nominalizer にあたるもの

(26)の-en や(27)の-u は nominalizer の一種と言える。

同じ項目で例にあげられているラサ・チベット語では、名詞化の際、修飾節の動詞に coreferent argument の格表示マーカーが付随するという。次の例では(29)の-sa-、(30)の-yag-、(31)の-pa-がそれにあたる。

(28) stag　gsod-mkhan[43]　mi…

tiger　kill-A/NOM　man

「虎を殺した男」（lit.「虎を殺すの男」）

(29) kho　sdod-sa-'i　khań-pa…

he/ABS live-LOC/NOM-GEN　house

「彼が住む家」（lit.「彼が（そこに）住むの家」）

(30) kho-s　stag　gsdod-yag-gi　me-mda…

he-ERG tiger kill-INSTR/NOM-GEN　gun

「彼が虎を殺した銃」（lit.「彼が（それで）虎を殺すの銃」）

(31) kho-s　bsad-pa-'i　stag…

he-ERG kill-O/NOM-GEN tiger

「彼が殺した虎」（lit.『彼が（それを）殺すの虎』）

このように格表示マーカーが動詞に付随する関係節化について Givón は、動詞コード（2.2.1.1.9.で後述）の傾向のやや弱いものであるという見方ができると述べている。

2.2.1.1.7.擬似格方略（equi-case strategy）

これは先述したヘブライ語（2.2.1.1.2.）に見られる特徴である。先に例を示す。

が見当たらないこともあってか、Givón はこの箇所で日本語には特に触れていない。

[43] -mkhan はここで nominalizer であるが、本来の用法は次の例の通り。

śín-mkhan　「大工」（lit.『木の匠』）

wood-expert

(32) ha-ish she-Yoav natan l-o et-ha-sefer neelam
the-man REL-Yoav gave to-him ACC-the-book disappeared
「ヨアヴが（彼に）本をあげた男はいなくなった」

(33) l-a-ish[44] she-Yoav natan (l-o) et-ha-sefer eyn kesef
to-the-man REL-Yoav gave to-him ACC-the-book not money
「ヨアヴが（彼に）本をあげた男にはお金がない」

(32)では ha-ish「男」が主節では主語、関係節では間接目的語として機能しているが、この時、関係節内には前方照応型の代名詞が義務的に置かれる。つまり節内に l-o がないと非文になる。一方(33)における ha-ish は、主節でも関係節内でも間接目的語で同一の格表示（与格）になる。この時、関係節内の間接目的語句 l-o は必須の成分でなくなる。つまり、主節の間接目的語句 l-a-ish が、関係節内の間接目的語句としての格を表示する役割をも擬似的に（equi-case として）果たすのである。この点は同じ前方照応型代名詞を伴う言語でも、アルバニア語とは大きく異なるところである。

2.2.1.1.8.ブラケット方略（bracketing strategy）

パプワ諸語に属する Hewa は SOV 言語であるが、先行詞に照応する coreferent argument としての名詞句が関係節に残ったままであることが多く、その結果、主節と関係節で同じ名詞句がそのまま繰り返される。

(34) an-a möfi-lë wipe m-ié-m-e
1.sg.-SUBJ man-1.sg./SUBJ pig IND-shoot-REM-REAL
möfi-le m-ei-y-e
man-OBJ IND-see-REC-REAL
「私は豚を撃った男を見た」
（lit.『私は、男が豚を撃った（のだが、その）男を見た』）

(35) yau-lopa amau ma-lë nap-ëe mo-nó-m-e

[44] 前置詞 l-（ל）と限定詞 ha-（ה）とで l-a-（הל）になる。

dog-3.pl./SUBJ　food mother-3.sg./SUBJ we-dat.　REAL-give-REM-REAL

amau[45]　m-a-y-e

food　IND-eat-REC-REAL

「犬は母が我々にくれた食物を食べてしまった」

（lit.『犬は、食物を母が我々にくれた（のだが、その）食物を食べてしまった』）

これらの例は一見すると、先述（2.2.1.1.1.）した非埋め込み方略の例（特に Bambara の例(3)）によく似ている。しかし非埋め込み方略の場合、関係節内の名詞に対して主節であらわれる coreferent argument は名詞に照応する代名詞（または指示詞）であり、一方 Hewa の例では名詞が主節においてそのまま繰り返される傾向が強い。(34)の möfi「男」、(35)の amau「食物」がそれにあたる。しかも非埋め込み方略では修飾節がすべて主節に後置（場合によっては前置）されるのに対し、この Hewa の例では関係節が主節に前置され、主題（theme）化しているという特徴も見られる。結果として主文の中に挟み込まれ、あたかも括弧でくくり込まれた（bracket された）ように見える。

なお Hewa には関係詞に類する指示詞（tele や toló）を用いる例もある。

(36) yau-lopa　amau ma-lë　nap-ëe　mo-nó-m-e

dog-3.pl./SUBJ food mother-3.sg./SUBJ　we-dat.　REAL-give-REM-REAL

tele　m-a-y-e

that　IND-eat-REC-REAL

「犬は母が我々にくれた食物を食べてしまった」

（lit.『犬は、食物を母が我々にくれた（のだが、）それを食べてしまった』）

---

[45] この言語では、直接目的語が［＋human］である時は object marker（marked postposition とも）を名詞に付加するが、そうでない時（［－human］）、つまりここで用いられている「食物」のような名詞には何も付かない。一方、間接目的語は名詞の種類に関係なく object marker を伴うとのことであり、間接目的語が常に marked である点はアルバニア語の例を想起させる（1.3.4.1.2.及び 2.1.3.1.）。

この(36)のような場合でも、語順は(35)とまったく同じである。これらのことについて Givón は、Hewa の関係節化には Bambara と同様の非埋め込みや前方照応型代名詞、加えてドイツ語などと同様の関係代名詞といったひと通りの特徴が見られると述べている。この考え方を進めると、あらゆる言語の関係節化は、これまでに述べた方略の混合形態として説明できるのではないだろうか。そのことをアルバニア語について実証する前に、Givón が示している例をもう少し見ておこう。

2.2.1.1.9.動詞コード方略（verb-coding strategy）

ラサ・チベット語の名詞化方略の例（2.2.1.1.6.）で見たように、関係節内の動詞が coreferent argument に相当する格表示マーカーを伴う場合がある。これは（非埋め込み型やブラケット化の例とは逆に）関係節内から coreferent argument が取り除かれる代わりに、関係節内の動詞にその役割が付加される（coding を受ける）ことであると言える。

こうした例としてあげられているのがフィリピンの Bikol における関係節化である。この言語では、常にそれぞれの語頭に付されて意味役割を表示するマーカーが、関係節化の際にも重要な役割を果たしている[46]。目的語に限って言えば、この格表示マーカーと同じような役割をバルカン諸語の重叙代名詞が担っていると言える（1 章の例(4)(5)(6)(7)及び(10)参照）。

次の 6 つの例文では、(37)(39)(41)の単文の例と、(38)(40)(42)の関係文の例がそれぞれ対応している。

(37) nag-ta’o　’ang-lalake　ning-libro　sa-babaye（単文　動作主に topic）
AGT-give　TOP-man　PAT-book　DAT-woman
「男は本を女に与えた」

(38) marai　’ang-lalake　na　nag-ta’o　ning-libro　sa-babaye
good　TOP-man　REL　AGT-give　PAT-book　DAT-woman

[46] Givón はこの言語の説明で、特に受動相を含む文例について詳しく述べている。また他にも KinyaRwanda の例をあげている（1990: 670ff.）が、本論には直接関わってこないと思われるので省略した。

（関係節内で動作主）

「（男が）本を女に与えた（ところの）男はいい人だ」

(39) na-ta’o　kang-lalake　’ang-libro　sa-babaye（Patient-topic）

PAT-give　AGT-man　TOP-book　DAT-woman

「本は男が女に与えた」

(40) marai　’ang-libro　na　na-ta’o　kang-lalake　sa-babaye

good　TOP-book　REL　PAT-give　AGT-man　DAT-woman

（関係節内で被動作主）

「男が女に（それを）与えた（ところの）本はいい本だ」

(41) na-ta’o-an　kang-lalake　ning-libro　’ang-babaye（Dative-topic）

DAT-give-DAT　AGT-man　PAT-book　TOP-woman

「女は男に本をもらった」（lit.『女（に）は、男が本を与えた』）

(42) marai　’ang-babaye　na　na-ta’o-an　kang-lalake　ning-libro

good　TOP-woman　REL　DAT-give-DAT　AGT-man　PAT-book

（関係節内で与格）

「男に本をもらった（ところの）女はいい人だ」

（lit.『（彼女に）男が本を与えたところの女は…』）

(38)では lalake「男」に対応する動作主マーカーである nag-、(40)では libro「本」に対応する被動作主マーカーである na-、(42)では babaye「女」に対応する与格マーカーである na-an が、それぞれ関係節化した後の節内動詞に残っている。この格表示は、ちょうどアルバニア語の që 関係節やギリシア語の που 関係節における節内重叙代名詞とよく似た役割を持つと言えよう。

2.2.1.1.10.混合型関係節化方略（mixed relativization strategy）

ブラケット方略について示した際（2.2.1.1.8.）、他の言語の関係節化もここに述べたいくつかの方略の組み合わせとして説明できるのではないかということを指摘した。Givón はミクロネシアの Ponapean を例にあげている。

この言語には、関係詞と指示詞によってくくられたブラケット型[47]関係節の特徴が見られる一方、関係節内の動詞には格表示マーカーによるコード化の傾向も見られる。しかし Givón によればこのコード化は与格にのみ必須のものであり、Ponapean の関係節化は部分的な動詞コード化とブラケット化の組み合わせであると言えよう。次の例の場合、(44)と(45)にはコード化が起こらず、(47)には与格の格表示マーカーがあらわれている。

(43) lii kilang ool[48]
woman see man
「女は男を見た」

(44) lii me kilang ool-ǫ
woman REL see man-DEM
「男を見た（ところの）女」

(45) ool me lii kilang-ǫ
man REL woman see-DEM
「女が見た（ところの）男」

(46) lii ki-ǫ ng serapein-o puung
woman give-DAT girl-DEF book
「女はその少女に本を与えた」

(47) serapein-o me lii-o ki-ǫ ng puuk-o…
girl-DEF REL woman-DEF give-DAT book-DEM
「女が本を与えた（ところの）少女」

このように、(44)のみ serapein「少女」に対応する与格マーカー-ǫ ng が関係節内の動詞 ki-に付随している[49]。関係詞 me が不変化であることを考えると、2.2.1.1.9.の場合と同様、この格表示もアルバニア語の që 関係節や

[47] Givón は“morphologically double-bracketed”であると述べている（1990: 676）。
[48] Ponapean は SVO 言語であり、単文における主語と直接目的語は格表示を伴わない。
[49] 例文(47)から与格マーカーを除いた場合について、Givón はこれを非文であるとしている（1990: 677）。

ギリシア語の που 関係節における節内重叙代名詞とよく似た役割を持つように見える。

2.2.1.1.11.言語類型から見たアルバニア語、及びバルカン諸語の関係節内重叙

前節までで、Givón が類型統語論の観点から行っている関係節化の類別を概観した。このように現実の言語では関係節化のための多種多様な「方略」がとられ（また組み合わされ）ており、このことは、アルバニア語や他のバルカン諸語における関係代名詞節の特徴が必ずしも特殊なものではないことを示唆している。

関係代名詞（2.2.1.1.3.）そのものを含む上記８つの方略のうち、明らかにバルカン諸語の関係節に関する論議からまず切り離してよいと考えられるのは、語順方略（2.2.1.1.5.）と名詞化方略（2.2.1.1.6.）、それに擬似格方略（2.2.1.1.7.）である[50]。ギャップ方略（2.2.1.1.4.）も直接の類似性はないが、Bora に見られるような coreferent argument と節内動詞の密接な結びつきは（例(21)と(22)の-be）は、本章で問題にしている補文節内重叙の例によく似ている[51]。ブラケット方略（2.2.1.1.8.）における Bambara の例（例(34)(35)(36)）にも、節内の coreferent argument が見られる。

また、動詞コード方略（2.2.1.1.9.）の例としてあげた Bikol の格表示マーカー（例(37)から(42)まで）は前方照応型代名詞（2.1.1.1.2.）、例えばバルカン諸語（ブルガリア語を除く）における代名詞重叙の、さらに基本的な状態であると考えることもできるのではないだろうか。違うのは、バルカン諸語ではこうした動詞コード（つまり動詞と弱形人称代名詞の結びつき）が目的語格に限られることと、その動詞コードが文の談話的背景によっては生じたり生じなかったりするという点である。

---

50 ただ、ラサ・ティベット語のように名詞化に動詞コード化が併用されている例もあるし、ヘブライ語の equi-case にしても、そもそもこの言語の関係節構造における anaphorical pronoun の存在を前提としていることには、一応留意しておくべきだろう。

51 もちろん決定的に異なるのは、この言語の補文節化が語順（特に動詞の配語）に大きく依存しており、代名詞-be にはそれを補完する意味もある、

動詞コードという現象の存在は、「重叙」という現象が従来抱かれがちな「本来必要でないもの」や「冗長なもの」では必ずしもなく、むしろ基本的に必要な文内要素として振舞う[52]ものであるという本論の見解を支持するものと考えられる。

残念ながら Givón の示す例では、個別言語における文脈・言語外情報がどのように関与しているかについてそれほど詳しく記述されていない。しかしこれらの例を踏まえて言語類型の中でアルバニア語の目的語重叙をとらえる時、それは局地的、例外的な現象でなく普遍的な言語現象の一つとして見えてくるのである。

2.2.1.2.アルバニア語学における補文構造の研究

アルバニア語における関係節内重叙について、その現象そのものを説明している文献はもちろん多数存在する。しかし本論で問題としているような重叙の諸条件について個別具体的に論じているものは、現在まで調べた時点では皆無に等しい。

ここでは、アルバニア語の重叙現象と補文構造について言及している文献・論文を、筆者が確認した限りで以下にあげる。

まず弱形人称代名詞については、主に規範文法の形態論として Domi (1957) や Demiraj (1975: 128ff.)。周辺言語との比較形態論では Demiraj (1983) 。形成史は Demiraj (1973)、Likaj (1983) が詳しく、また少々古くなるが Mann, Stuart E. (1932: 80f.) もある[53]。

目的語重叙に言及したものとしては、まず規範文法上の解説として Domi (1957: 39ff.) や *Fonetika dhe gramatika* (1983: 73ff., 215ff.)。重叙現象を統語的に解説した論文として Demiraj (1983) がある。ここでは 2.1.3.1.でも述べた動詞中心の配語関係が取り上げられている。またトスク方言の代名詞形

という点である。

[52] ここで特に 2.1.5.3.で引用した「弱形人称代名詞をとることで、他動詞は何か一種の落ちつきを得るといったようなところがある」という記述を想起されたい。

[53] ただし Mann の歴史文法には今日の研究成果を踏まえて見た場合、明らかな誤りもあると言われているので、扱いには注意が必要である。Orel

態論を扱った貴重な研究として Sheperi (1927: 156-157) がある。

特に目的語句[54]と代名詞の機能に関する研究が多いものとして Përnaska (1982) の歴史的な説明、Përnaska (1984, 1986) における重叙構造の構文論などがある。これらの議論には歴史的背景への言及が多く、先に述べた1950～60 年代の論争（2.1.2.や 2.1.3.など）も背景としてよくまとめられている。ただし関係節内重叙への言及は見られない[55]。

アルバニア語の関係代名詞に対象を絞ったものをあげる。まず i cili などの形態論は Demiraj, Shaban (1967: 262-272)。që[56]の用法は 1.2.2.に述べたことの他、文体論的には話し言葉においてよく用いられる、前置詞句などとの組み合わせでは i cili の使用が好まれるなどの傾向が指摘されているが、これを詳述したものとしては Totoni (1984, 1985) や Karapinjalli (1987, 1988, 1990) がある[57]。

歴史文法は Demiraj, Shaban (1973: 165ff.)など。序論で Buzuku や方言テクストを概観した（1.3.4.、1.3.5.）際でも明らかであるが、歴史的に që の方が早くから（qe、qi などの形で）用いられていたことはこれらの文献にも示されている。最後に、që が関係節内で与格として用いられている例（2.2.3.5.2.参照）を紹介している論文として Totoni (1984) がある。

2.2.1.3.他のバルカン諸語における補文構造の研究

前章（1.3.6.4.）でバルカン関係節と重叙の関係についてまとめたが、屈折型関係代名詞（o οποίος）で節内の代名詞重叙が起こらない現代ギリシア

（1998, 2000）。

[54] 比較的古いが、目的語句全般について分類したものとして Domi (1957: 158ff.) がある。

[55] この他、目的語句（të＋接続法の動詞句なども含む）を分類したものとして Përnaska (1970, 1983)。近年では目的語句の研究対象に前置詞句をも包括している。詳しくは Përnaska（1996）。なお、外国語で読めるものとしては Përnaska (1986, 1988)。

[56] 本論には関らないが、që を含む複合接続詞句の構造について論じたものに Mansaku (1975) がある。

[57] これらの論文が掲載されている *Gjuha jonë* が主に一般のアルバニア語話者向けに正書法と規範文法の普及を目的としたものであるため、解説自体に理論的詳しさは余りないが、実例は豊富である。

語とブルガリア語[58]を除く他の２言語について、補文構造に言及した研究例を列挙する（2.1.2.の注であげたものは除く）。

アルバニア語と同じく屈折型関係代名詞で節内の代名詞重叙が起こるルーマニア語では、まず重叙代名詞の形態・機能について *Gramatica* (1963a: 97-113, 135-180)、Asan (1957)、Budagov (1950)、Iordan (1956: 629-647)、Lombard (1972)、Будагов (1958: 64-103)。
関係代名詞節や目的語補文節については、*Gramatica* (1963b: 418-420, 505, 506-507) に全般的な解説がある。また Seidel-Slotty (1940)にも補文への言及が見られる他、歴史的研究としては Saramandu (1965, 1966) などがある。しかし筆者の調べた限り、目的語重叙に関する議論（先行研究は 1.3.1.の注を参照）は、関係節については（形式・語順への言及は別として）文脈や情報との関りについては特に問題とされていない。

同じく屈折型関係代名詞で節内の代名詞重叙が起こるマケドニア語については、重叙代名詞の形態・機能について Gołąb (1953)、Голомб (1960/1961: 114-144, 1965)、Конески (1987)。кojшто と што の関係節そのものに対する統語論的見解は Конески (1965, 1987) の概説的な記述を除けば、ほとんど見当たらない。

---

[58] ただし筆者があたった論文の中でブルガリア語の重叙代名詞の形態・機能を扱ったものは比較的多く、代名詞に関する研究で、何らかの形で重叙現象に触れているものは Gălăbov, (1950)、Popov (1967)、Walter (1965)、Генадиева-Мутафчиева (1962)、Георгев (1993: 66-68)、Иванчев (1957)、Манолова (1979)、Минчева (1964, 1968, 1969)、Попов (1962)、Цихун (1962)、Чешко (1957)。また歴史的研究（代名詞全般も含む）としては Sławski (1946)、Георгиев (1952: 80-85)、Илчев (1964)、Мирчев (1945/1946: 50f., 1963: 57-95, 162-173, 224)、Ожеховска (1967)、Русек (1963)。ブルガリア語の補文節については Стоянов (1984: 447-448) や Рожновская (1963) の他、目的語句に絞ったものとしては Попов (1974: 163-175, 276-280, 282-292) の研究例がある。

2.2.2.先行研究における問題点

2.2.1.1.で関係節のアルバニア語やバルカン諸語に関する先行研究を概観した。一つの傾向として指摘できるのは、序論でも既に問題としているような関係節内重叙の諸条件について、個別具体的に論じているものが皆無に等しいことである。重叙現象そのものについて論じたものは多数あり（2.1.3.参照）、関係節を扱った記述そのものも少ないわけではない（2.2.1.3.）。しかし両者の問題をあわせて論じたものがほとんど出てこないのである。

もちろん前述の Përnaska のように目的語補文に多くの研究成果を残している例もある。あるいは「統語論」の観点から行われたとされる例も少なくない（Përnaska など）。しかしながら、それは数種類の配語構造、すなわち語順や特定の文法要素の有無を事実として示すに留まっており、筆者が考える機能主義的な（あるいは談話論的な）要素を踏まえた統語論という観点を満足させるものではない。例えば、i cili を目的語とする関係節内で常に「重叙代名詞＋動詞」の構造が生じ、që ではそれが任意である、という構造そのものは既に指摘されているが、そもそもそれがなぜなのか、例えばどのような内容の文でそれが起こり、どのような条件では起こらないのか、またそこにどの程度の格差があるのか等については、初めから議論の対象になっていないことが多いのである。

一連の先行研究に見られるもう一つの傾向は、関係代名詞の歴史的研究がきわめて盛んに行われている（2.1.2.）一方で、その関係代名詞を含む文構造に対する機能主義的[59]な見解が見当たらない点である。これには、アルバニア語の置かれた歴史言語学的な位置付けの重要性も関っており、そちらの方面に現地研究の比重が偏っているのではないかと考えられる。

また周辺言語との通時的比較は様々に行われているが、それはあくまでも「バルカン言語圏」や「インド・ヨーロッパ語」の枠組みを基本とした

---

[59] この用語に対する筆者の解釈については既に別の注で述べた通りである。「語用論的」「談話論的」あるいは「テクスト言語学的」と言い替えても大きな問題はないかも知れないが、「統語論」と併せて用いて不自然でないのは今のところこの用語ではないかと思われる。

ものである。2.2.1.1.で示した Givón の分類を見る限り、アルバニア語（おそらく他のバルカン諸語も）の関係節内重叙は特殊な現象でなく、またフランス語やイタリア語などロマンス諸語の一部に見られるというだけでもなく、言語全般に起こり得る、ごく普遍的な現象である可能性が高い[60]と筆者は考える。

もう一つ配慮すべき点を指摘すると、既に述べたように që や i cili の選択には話しことばや文章語など、テクストの文体が影響していることが知られている。この点を考慮しないと、統語構造の正確な分析は難しい。従って、まず異なる種類のテクストについて、並行して節内重叙の傾向を調べ、しかるのちに全体的な議論を行う必要があると考えられる。

以上の点を踏まえて、次節でテクストの具体例を分類・分析する。

[60] これは前節、および序論でも既に繰り返していることである（1.1.1.）。

2.2.3.問題点の解明

2.2.3.1.テクストの分類とその結果

ここでは以下のテクスト毎に関係節内重叙の分類を行う。まず（A）基本的な文章語で書かれているものとして *Historia 4* および *Historia 8*、（B）小説として Kadare (2001) および Agolli (2000) 、（C）その他の文学テクストとして Shkurtaj/ Hysa (1996) に掲載されている近現代文学作品（散文に限る）の抜粋、（D）新聞の例として *Zëri i Popullit* の 1 週間分（2001 年 3 月 1 日～3 月 8 日）から全記事全文[61]を対象とした。

まず各テクスト毎に関係節と先行詞[62]を含む箇所を取り出し①関係代名詞が節内で直接目的語または間接目的語として機能している例を選び②関係代名詞は që か i cili か③弱形代名詞による重叙の有無によって分類した。që については、副詞・形容詞的補語を導く補文標識として用いられている場合や、前置詞の補助[63]として用いられている場合などは除外してある。

結果をまとめると、次のようになる。

（A）*Historia 4* および *Historia 8* における重叙の分布

---

[61] 見出し文については、簡潔さを要求されるために文が短縮される可能性も念頭に置いたが、今回の対象に該当する関係節は出てこなかった。結果として見出し文は文例に含まれていないことを付言しておく。

[62] 先行詞は原則として定形である。次のように形式上不定である例もあるが、実際には指示詞や関係節によって意味範囲は制限されており、特定のものを指す。従って本論では先行詞の定・不定について特に問題としない。

një libër të <u>një autori</u> <u>që</u> s’<u>i</u> kujtohej emri（Kadare, 39）

a book a author-gen. that not 3.sg.dat. remind-pas.impf.sg.3 name-df.sg.nom.

「（その）名前は思い出せないが、<u>ある作家</u>の本」

[63] 例えば次のような用法；

fakti <u>që</u> ka ardhur këtu

fact-df. that come-pf.sg.3 here 「彼がここにきた<u>という</u>事実」

<u>që</u> nga marsi

from March 「3 月から」（që は前置詞を強めるだけで、訳には出てこない）

こうした用法については井浦（1995）。

表 14（直接目的語の場合）

	重叙する	重叙しない	計
që	17 (27%)	44 (73%)	61
i cili	12 (100%)	0 (0%)	12
計	29 (38%)	45 (62%)	73

表 15（間接目的語の場合）

	重叙する	重叙しない	計
që	0 (0%)	0 (0%)	0
i cili	3 (100%)	0 (0%)	3
計	3 (100%)	0 (0%)	3

（B）

Kadare（2001）における重叙の分布

表 16（直接目的語の場合）

	重叙する	重叙しない	計
që	41 (50%)	42 (50%)	83
i cili	3 (100%)	0 (0%)	3
計	44 (51%)	42 (49%)	86

表 17（間接目的語の場合）

	重叙する	重叙しない	計
që	9 (100%)	0 (0%)	9
i cili	1 (100%)	0 (0%)	1
計	10 (100%)	0 (0%)	10

Agolli（2001）における重叙の分布

表 18（直接目的語の場合）

	重叙する	重叙しない	計
që	45 (57%)	31 (33%)	76
i cili	3 (100%)	0 (0%)	3
計	48 (59%)	31 (41%)	79

表 19（間接目的語の場合）

	重叙する	重叙しない	計

që	3 (100%)	0 (0%)	3
i cili	2 (100%)	0 (0%)	2
計	5 (100%)	0 (0%)	5

（C）Shkurtaj/ Hysa（1996）における重叙の分布

表 20（直接目的語の場合）

	重叙する	重叙しない	計
që	14 (74%)	5 (26%)	19
i cili	6 (100%)	0 (0%)	6
計	20 (80%)	5 (20%)	25

表 21（間接目的語の場合）

	重叙する	重叙しない	計
që	1 (100%)	0 (0%)	1
i cili	0 (0%)	0 (0%)	0
計	1 (100%)	0 (0%)	1

（D）*Zëri i Popullit* における重叙の分布

表 22（直接目的語の場合）

	重叙する	重叙しない	計
që	15 (12%)	110 (88%)	125
i cili	14 (100%)	0 (0%)	14
計	29 (21%)	110 (79%)	139

表 23（間接目的語の場合）

	重叙する	重叙しない	計
që	0 (0%)	0 (0%)	0
i cili	4 (100%)	0 (0%)	4
計	4 (100%)	0 (0%)	4

（以上、比率は各行毎の計算による）

表を見る際に前提となる重叙の基本条件をあげておこう。①関係代名詞が節内で間接目的語（与格）である場合は、常に重叙代名詞を伴う（2.1.3.や 2.1.5.参照）。②i cili は節内で目的語となる場合常に重叙代名詞を伴うが、që においては任意である（1.2.2.参照）。③që は非屈折型の関係代名詞であ

り、形態上の理由から節内で間接目的語（与格）として用いられることは通常ない（1.3.6.参照）。これらを踏まえて、以下で詳しく分析する。

2.2.3.2.テクストの種類による相違

上にあげた表を見ると、それぞれのテクストで që と i cili の使用頻度、që 関係節における重叙頻度に明らかな違いが見られる。全体に対する議論に入る前に、前節でも言及した文体間の相違を確認しておこう。間接目的語としての例では大きな違いが見られないので、ここでは直接目的語の例について示す。

（A）典型的な文章語で書かれている *Historia 4* および *Historia 8* のテクストでは、që を節内目的語とする例が i cili を節内目的語とする例の約 5.6 倍である。また që を節内目的語とする例のうち、節内に重叙代名詞を伴わない例は 7 割を占めている。

（B）Kadare（2001）の小説では、që を節内目的語とする例が i cili を節内目的語とする例の 28 倍である。また që を節内目的語とする例のうち、節内に重叙代名詞を伴う例と伴わない例は同数である。一方 Agolli（2000）の小説では、që を節内目的語とする例が i cili を節内目的語とする例の約 26 倍である。また që を節内目的語とする例のうち、節内に重叙代名詞を伴わない例は 3 割を占めている。

（C）Shkurtaj/ Hysa（1996）の小説抜粋から成るテクストでは、që を節内目的語とする例が i cili を節内目的語とする例の約 3 倍である。また që を節内目的語とする例のうち、節内に重叙代名詞を伴わない例は 2 割強で、重叙を伴う例の方が多くなっている。

（D）新聞 *Zëri i Popullit* のテクストでは、që を節内目的語とする例が i cili を節内目的語とする例の約 8 倍であった。また që を節内目的語とする例のうち、節内に重叙代名詞を伴わない例は 9 割近く、重叙する場合よりも圧倒的に多い。

以上のことから、që の i cili に対する使用頻度の大きさ、および që 関係節内における重叙しない例の頻度の大きさについて、各テクストの順位を示すと次のようになる（表 24）。

表 24

që の i cili に対する使用頻度

Kadare＞Agolli＞*Zëri i Popullit*＞*Historia*＞Shkurtaj/ Hysa

që 関係節内における重叙しない例の頻度

Zëri i Popullit＞*Historia*＞Kadare＞Agolli＞Shkurtaj/ Hysa

この表を見る限り、ここであげた様々な種類のテクストには大きく 3 つのグループがあると考えられる。

まず小説テクストである Kadare（2001）と Agolli（2000）の文例からは、関係節の選択[64]において i cili よりも që を好む傾向が強いことを見てとれる。ただ që 節内における重叙の有無は中程度で、極端な格差があるわけではない。また、që を関係節内で間接目的語として用いる例が他のテクストより多いのもこのグループの特徴である。

新聞 *Zëri i Popullit* と文章語テクスト *Historia 4* および *8* では、që と i cili の使用頻度の差は上述した小説テクストの場合ほど大きくはない。しかし që 節内では圧倒的多数の例で重叙が起こっておらず、他のテクストと顕著な違いを示している。*Zëri i Popullit* の場合、書き言葉でありながらも（文学テクストとは異なり）日常的用法に近い簡潔さを旨とする、新聞テクスト特有の性質も関っているのではないだろうか。

Shkurtaj/ Hysa の文例では、që と i cili の使用頻度の差は全テクストの中で最も小さい。また që 節内で重叙しない頻度も少ない。言い換えれば、他のテクストよりも屈折型関係代名詞 i cili が好まれる傾向があり、関係節内重叙の傾向も強いということである。

最後のグループで i cili 節の頻度が高い理由としては、近現代の文学作品を対象としていることが考えられる。特に近代の文学テクストでは、よく

---

[64] もちろんここでは目的語としての場合に限って議論を進めている。例えば関係詞が前置詞句として用いられる場合は、ひとつの例外もなく屈折型 i cili である。

shtëpia　<u>në　　të cilën</u>　shoku　banon
house-sg.df.　in　which-m.sg.acc. friend –sg.df. live-sg.3
「友人が（<u>そこに</u>）住んでいる家」

整った文章語が用いられる傾向にあり、このことが i cili 節の頻度をあげているのではないか。この点からすると、20 世紀後半期の作家である Kadare や Agolli で që の頻度が大幅に増している一方、新聞や歴史書の記述で i cili 節の選択度が中程度に保持されていることは、現代アルバニア語の書き言葉の傾向として興味深い。

2.2.3.3.テクスト全体に見られる特徴

前節で述べたように、関係詞の選択や節内重叙には、テクストの種類による程度の違いがある。

しかしながら、全テクストを通じて明らかに共通している点もある（表 25，26）。例えば、文の種類による程度の差があるとは言え、屈折型関係代名詞 i cili よりも非屈折型関係代名詞 që が多数を占める傾向は変わらない。また që 関係節内で重叙を伴わない例もテクストを問わず明らかに多い。

全文例における関係詞選択と重叙の傾向

表 25（直接目的語の場合）

	重叙する	重叙しない	計
që	**132 (36%)**	**232 (64%)**	**364**
i cili	**38 (100%)**	**0 (0%)**	**38**
計	**170 (42%)**	**232 (58%)**	**402**

表 26（間接目的語の場合）

	重叙する	重叙しない	計
që	**13 (100%)**	**0 (0%)**	**13**
i cili	**10 (100%)**	**0 (0%)**	**10**
計	**23 (100%)**	**0 (0%)**	**23**

（比率は各行毎の計算による）

2.1.5.1.で示したように、目的語代名詞が動詞に先行する場合、その動詞は重叙代名詞を必ず伴う。関係代名詞も代名詞であり、しかも常に動詞に先行するのだから、その関係代名詞が節内で目的語として用いられている

場合、節内動詞には重叙代名詞が付随するはずである。だが実際は必ずしもそうなっていない。

そこで次節以下では、që 関係節がどのような例で使われているのか、また（特に直接目的語で）どのような条件下で代名詞重叙が行われないのかに主に着目して、個別例に対する考察を進めていく。

2.2.3.4.関係代名詞 i cili の補文節内における重叙

2.2.3.4.1.直接目的語として機能する場合

これはテクストの種類を問わず、常に代名詞重叙を伴っている。ここでは i cili 節が比較的よく用いられている Shkurtaj/ Hysa のテクストから例をあげる。

(1) gjuhët e huaja, <u>të cilat</u> <u>i</u> mësonte
language-pl.nom.df. foreign which-f.pl.acc. 3.pl.acc. learn-impf.sg.3
me mësues të posaçëm në shtëpi
with teacher-sg.acc.df. particular in house
「彼が（<u>それらを</u>）特別の家庭教師の下で学んでいた外国語」（Shkurtaj/ Hysa: 266）

Shkurtaj/ Hysa のテクストには次のような例もある。

(2) Për pergamentet e tua, <u>të cilët</u> me parë <u>i</u> kishe mbajtur në qeli,
for parchment-pl.acc.df. your which-m.pl.acc. first 3.pl.acc. keep-pf.sg.2 in cell
<u>që</u> <u>i</u> kishe sjellë atje dhe <u>që</u> pastaj sërish kishe dashur
that 3.pl.acc. bring-pf.sg.2 there and that then again like-pf.sg.2
t'<u>i</u> merrje
3.pl.acc. take-impf.sg.2
「君がまず獄中で（<u>それを</u>）持ち続け、そこから（<u>それを</u>）持ち出して、それからまだ（<u>それを</u>）持ち続けることを望んだ羊皮紙の写本について」（Shkurtaj/ Hysa: 328）[65]

[65] この文には、「羊皮紙」について語りだす際の付随事項をあとへあとへと付け加えているという構造があって、事実上は非制限節として、ちょう

連続した関係節では最初のみ i cili であり、2 番目以降は që 関係節となっている。これはどの関係代名詞も同一のものをさし、なおかついずれも直接目的語であることから i cili 節の繰り返しによる煩雑さを避けているものと見られる。しかし、そうした環境でも節内重叙が 3 つの関係節全てに起こっていることに注目されたい。

2.2.3.4.2.間接目的語として機能する場合

例は少ないのだが、全ての例で重叙が常に起こっている。もっとも文例数が多い *Zëri i Popullit* のテクストから例を示す。

(3) stabiliteti i Maqedonisë, <u>së cilit</u> Shqipëria dhe
stability-sg.nom.df. Macedonia-gen. which-m.sg.dat. Albania-nom. and
shqiptarët në përgjithësi
Albanian-pl. in general
<u>i</u> kanë shërbyer në mënyrë të sinqertë
3.sg.dat. serve-pf.pl.3 in manner sicere

「アルバニアとアルバニア人が（<u>それに</u>）真摯に努めてきたマケドニアの安定は」（*Zëri i Popullit*: 06.03.2001）

与格重叙が構文に影響されないことは、関係節内主語が省略された次のような例でも同様である。

(4) ata persona, <u>të cilëve</u> <u>u</u> takon vërtetë sipas ligjit
those person-pl. which-m.pl.dat. 3.pl.dat. touch-sg.3 by law-sg.abl.

ど連続する 3 つの単文のように読むことも可能である。
「君の羊皮紙の写本についてだが、君はまず獄中で<u>それを</u>持ち続け、そこから<u>それを</u>持ち出して、それからまだ<u>それを</u>持ち続けることを望んだ」
この場合、アルバニア語の単文における重叙頻度の高さと先行する話題「羊皮紙の写本」の存在から見て、3 つの重叙はさらに当然なものと言える。
なお、それぞれの関係節がコンマで区切られていることも、もちろんこのように解釈する手がかりの一つではある。ただアルバニア語ではこの点の区別が（英語ほどには）はっきりしていないので、常に役立つとは限ら

「（首相が）法に従って（彼らに）会った人々」（*Zëri i Popullit*: 08.03.2001）

これは単文の例で述べた与格の階層性（1.3.4.4.）から見て、当然であり予想通りの結果であると言える

ところで、関係節内で間接目的語としてふるまう関係代名詞の例は、それが直接目的語である場合に比べてかなり少ないのだが、これについては二つの理由が考えられる。一つは、アルバニア語においては動詞の中受動相の使用頻度が高く、与格目的語が主語に書き換えられる傾向があること。もう一つは、「前置詞＋関係代名詞」によって事実上の間接目的語を表す場合もある（統語的には目的語でなく副詞節であり、もちろん重叙は起こらない）のだが、これを今回の分析対象から除外していることである。

2.2.3.5.関係代名詞 që の補文節内における重叙

1.3.6.4.でルーマニア語の場合と併せて指摘したように、アルバニア語ではもともと目的語重叙という現象の頻度が高いので、特に resumptive pronoun である関係詞の重叙代名詞についてはそれが常用化し、もはや有標性を持たなくなっていると見てよいだろう。i cili 関係節に見られる現象はこれで説明できるし、実際の文例もこのことをよく示している。

問題は、që 関係節についてこの基準が（特に直接目的語の場合）必ずしも成り立たないことである。ルーマニア語の場合、非屈折型関係代名詞 ce の選択基準が著しく制限されているから、care と ce の使い分けが確立し、「重叙し得る屈折型」と「重叙しない非屈折型」への二極化が起こっているという可能性を序論で示したが、アルバニア語にも同じようなことが起こっているのだろうか。言い換えれば、「非重叙の傾向が高い që 関係節」と「重叙の傾向が高い i cili 関係節」への二極化があるのではないだろうか。

2.2.3.5.1.直接目的語として機能する場合

ない。

関係節内で直接目的語として機能する që については、個別の文について、語の意味や文脈を念頭に置きながら分析を行う必要がある。この場合、文学作品では作者独特の言外情報などが影響する可能性があるので、ここでは主に *Zëri i Popullit* や *Historia 4* および *8* の文例を使用する。

2.2.3.5.1.1.重叙が起こらない場合

Zëri i Popullit の例文から që 補文を分類した際に気付くのは、節内の配語にいくつかの傾向が見られ、それによって文例がうまく整理できることである。

（A）節内に主語が示されている場合

問題となる 110 の文例のうち、76 の関係節には明確な主語があり、これらは形態面からも主格であることが容易に判別し得る。

(5) lidhje me problematikën <u>që</u> ø reflekton *Kodi* *Zgjedhor*
connection with problematics that reflect Code-sg.nom.df. Electoral
「*選挙法*が反映している問題との関係」（*Zëri i Popullit*: 01.03.2001）

(6) për mbledhjen <u>që</u> *Britania* *e Madhe* do t'i
about conference-sg.acc. that Britain-sg.nom.df. Great will 3.sg.dat.
ø ofrojë Shqiperisë
offer-subj.sg.3 Albania-dat.
「*イギリス*がアルバニアに呼びかけようとしている会議について」（*Zëri i Popullit*: 01.03.2001）

上の 2 例からわかるように、主語の位置は動詞の前後に近接しているのがこれらの構文グループの特徴である。また主語が人名の固有名詞や人称代名詞の主格形であっても条件は同じである。このように形態や語順が関係節の判別に関与している様子は、先に述べた語順方略（2.2.1.1.5.）を想起させる。

（B）節内に主語は示されていないが、動詞の形態から主語が明確である

場合

関係節内の主語が 1 人称であるため先行詞と文法的に一致し得ないことが容易に判別し得るもの、または先行詞と関係節内動詞の数が一致しないなどの理由で統語関係が判別し得る 21 の文例があった。

(7) ngarkesa me drogë <u>që</u> ø *kishim bllokuar* në Moskë
freight-pl. with narcotic drug that blockade-pl.1 in Moscow
「*我々がモスクワで阻止した麻薬の運搬車輌*」（*Zëri i Popullit*: 01.03.2001）

(8) tirazhi i librit <u>që</u> ø *botojnë shtëpitë botuese*
copy-sg.nom.df. book-sg.gen. that publish-pl.3 house-pl.nom.df. publishing
「*出版社（複数）が発行している*本の部数」
（*Zëri i Popullit*: 04.03.2001）

（C）節内に主語がなく、動詞の形態からも主語を判別し難いが、先行文脈から主語を判別できる場合

10 例がこれにあたる。これは、節内動詞の数や人称だけでは主語を判断できないが、先行文脈からただ一つの主語を特定することができる[66]。例えば次の例で kanë の主語は明らかに biznesmenët である。

(9) disktuar direkt me biznesmenët për të zgjidhur
discussion-part. directly with businessman-pl.acc. to solve-part.
shqetësimet <u>që</u> ø kanë
disturbance-pl.acc.df. that have-pl.3
「ビジネスマン達と、彼らが抱える悩みを直接話し合って」（*Zëri i Popullit*: 03.03.2001）

---

[66] これは先行文脈で主語であるとは限らない。
mirësitë e *tij* të shumta <u>që</u> na ka dhuruar
miracle-pl. his much that 1.pl.dat. present-pf.sg.3
「（彼が）我々に与えた多くの奇跡」（*Zëri i Popullit*: 06.03.2001）
ちなみに「彼」は「神」のことをさしている。

これとまったく同じことは *Historia* にも見られ、重叙しない që 関係節の例の大多数とも条件が合致する。

(10) *Fuqitë e Mëdha* ……. e rishikuan vendimin
power-pl.nom.df. big 3.sg.acc. review-impf.pl.3 decision-sg.acc.df.
<u>që</u> ø kishin marrë në Kongresin e Berlinit.
that make-pf. in Cogress Berlin-gen.
「*大国は*（中略）ベルリン会議で（彼らが）行った決定を再確認した」
（*Historia 8*: 115）

次の例も、一連の文脈で主語が一貫している点では同様である。

前後関係がわかるように、各段落ごとの出だしを含めてできる限り文脈全体を示すと次のようになる。

(11) *Gjergj Kastrioti-Skënderbeu* është një nga figurat më të shquara
G.K.-Skanderbeg-nom. be-sg.3 one from figure-pl.nom.df. most famous
të historisë sonë kombëtare. *Ai* lindi më 1405…*Gjergj* për një periudhë
history-en. our national He be born-aor.sg.3 in George-nom. for a period
10-vjeçare u edukua ……
10 years educate-pas.aor.sg.3
Gjergj Kastrioti ishte shtatlartë dhe shumë i fuqishëm.
George Kastriot-nom. be-impf.sg.3 tall and much powerfull
Ishte mendjemprehtë dhe mësoi disa gjuhë të huaja.
be-impf.sg.3 smart and learn-aro.sg.3 some language-pl.acc. foreign
Gjatë viteve të shkollimit *Gjergjit* iu vu
during year-pl.abl. schooling-sg.gen George-dat. 3.sg.dat. put-pas.aor.sg.3
emri mysliman Skënder.
name-sg.nom.df. moslem

Gjatë dhe pasi mbaroi shkollën……*ai* mori pjesë
during and after finish-aor.sg.3 school-sg.acc.df. he take-aor.sg.3 part

në fushata të ndryshme ushtarake……
in campaign-pl.acc.df. different military
Ishte trim dhe mjeshtër i rrallë……
be-impf.sg.3 warrior-sg.nom.indf. and master-sg.nom.indf. rare
Për shkollën <u>që</u> ø bëri dhe për aftësitë
for school-sg.acc.df. that make-aor.sg.3 and for capability-pl.acc.df.
<u>që</u> ø tregoi……
that display-aor.sg.3

「*ジェルジ・カストリオティ・スカンデルベウ*は我が民族の歴史で最も有名な人物である。*彼は* 1405 年に生まれた。*ジェルジは* 10 年間の学校教育を受けた（中略）

*ジェルジ・カストリオティは*背が高く力持ちであった。頭がよく、数ヶ国語を学んだ（中略）学校に通う間に*ジェルジには*スカンデルというムスリム名がつけられた。

学校に通う間、そして学校を出てから（中略）*彼は*様々な軍事行動に参加し（中略）類稀なる戦いの達人になっていた。

（彼が）作った学校と（彼が）示した才能について（後略）」

（*Historia 8*: 75）

この文例は Skëndeubeu という歴史的人物の人となりを解説する囲み記事の一節で、文の主語は（与格 Gjergjit で始まる一箇所を除いて）一貫して Skëndeubeu である。従って、関係節内に明確な主語がなくとも、容易に動作の主体を判断できるのではないだろうか。

（D）いずれにも合致しない例

次の例を含む 3 例がこれにあたる。

(12) bashkitë dhe komunat <u>që</u> ø drejtojnë demokratët
municipal government-pl. and comunal unit-pl. that govern-pl.3 democrat-pl.
「民主党が政権をとっている地方自治体」（*Zëri i Popullit*: 04.03.2001）

実は残る 2 つの例もこれとほとんど同じ内容で、繰り返し用いられている。違うのは最後の政党名だけである。bashkitë dhe komunat も demokratët も共に複数であるから形式的に主語／目的語を判別することはできないが、どちらが「政権をとる」主体であるかは明らかである。

2.2.3.5.1.2.重叙が起こる場合

前節で節内重叙が起こらない例の特徴を示した。では、節内重叙が起こっている që 関係節の文例は、上にあげた例とどう違うのだろうか。

Zëri i Popullit の 15 例には、節内の構造に似通った特徴を持つものがいくつかある。

(13) Këto janë masa <u>që</u> Beogradi *duhet t'*<u>i</u> ndërmarrë
these be-pl.3 way-pl.3 that Belgrade-nom. must 3.pl.acc. undertake
sa më parë me qëllim që të realizojë kushtet
as fast with goal that realize-subj.sg.3 condition-sg.acc.
「これらは、ベオグラードが条件を満たすために（<u>それを</u>）早急にとるべき方法である」(*Zëri i Popullit*: 01.03.2001)

(14) faktin <u>që</u> *s'*<u>e</u> gjen në asnjë qark tjetër të vendit
fact that not 3.sg.acc. find-sg.3 in any circle another country-sg.gen.
「国のほかの集団では（<u>それを</u>）見ることのない事実」
（*Zëri i Popullit*: 01.03.2001）

(15) faktet e mësipërme ..... <u>që</u> nuk *po* <u>i</u> përmend
fact-pl. above-mentioned that not now 3.pl.acc. mention-sg.3
në këtë komunikatë
in this communication
「この通知の中で（彼が<u>それに</u>）言及していない上述の［中略］事実」
（*Zëri i Popullit*: 01.03.2001）

このように、動詞の接続法を導く të、動詞に前接される否定の小辞 s'、

動作が継続相であることを示す小辞 po など、動詞に密接して用いられる小辞と重叙代名詞は共起する傾向があり、これが関係節でも生じていると考えられる。

また、動詞によっては常に重叙代名詞を伴うものもある。次の例では動詞 quaj「～を（対格）…と（補語）名付ける」がこれにあたる。

(16) një prirje, <u>që</u> <u>e</u> quajmë me plot gojën pozitive
one tendency that 3.sg.acc. call-pl.3 with whole mouth positive
「（我々が<u>それを</u>）まったく肯定的な口ぶりで語った一つの傾向」
（*Zëri i Popullit*: 04.03.2001）

次の例では、関係節内で主語と動詞の距離が挿入された副詞句のために広がっているが、このような場合にも「重叙代名詞＋動詞」の構造があらわれ、これによって節内の統語関係は明確になる。

(17) mesazh <u>që</u> ai personalisht <u>e</u> ka pranuar të jetë
message-sg. that he personally 3.sg.acc. accept-pf.sg.3 be-subj.sg.3
në të gjitha faqet e këtij libri
in all page-pl. this book-gen.
「彼が個人的に（<u>それを</u>）本書の全ページに渡って受け入れたメッセージ」（*Zëri i Popullit*: 04.04.2001）

また、ただ 1 例であるが、先行する文全体を受ける që 関係節の例があった。これは非制限節としての用法として考えるべきであろう。

(18) *që Shqipëria po bën progres, që vendi ynë*
that Albania now make-sg.3 progess-sg.acc. that country-sg.nom. our
po i afrohet më shumë Evropës, që në sytë
now 3.sg.dat. approach-sg.3 much more Europe-dat. that in eye-pl. *e*
komunitetit ndërkombëtar ne sot jemi më dinjitozë,
community-gen international we today be-pl.1 more dignified
më optimistë, <u>që</u> <u>e</u> thënë në menyrë të për mbledhur
more optimist that 3.sg.acc. say-aor.pl.3 in way to gather

「*アルバニアが進歩し、我が国がますますヨーロッパに近付き、国際社会の視線の中で我々がさらに威厳を増し、ますます楽観的でいる、このことを*（人々は）集まって告げている」（*Zëri i Popullit*: 04.03.2001）

以上の例でほぼすべての重叙を伴う që の例文があてはまるが、例えば次のような例外も２つあることを、本節の最後に付け加えておかなければならない。

(19) kaosi që e pasoi
chaos-sg.nom.df. that 3.sg.acc. pass-aor.sg.3
「（彼がそれを）やり過ごした混乱」（*Zëri i Popullit*: 07.03.2001）

記事の先行文脈から他動詞 pasoi の主体は明らかで、目的語が kaosi であることもわかると思われるのだが、にもかかわらず重叙が起こっている。あくまでも主語／目的語の混乱を防ぐためとも言えるが、前後の文脈からでは結論付けられない。

(20) akuzë që opozita e ka bërë kohë më parë
complainant-sg. that opposition-sg.nom.df. 3.sg.acc. make-pf.sg.3 those days
「野党が以前に（それを）行った非難」（*Zëri i Popullit*: 07.03.2001）

これは opozita が明らかに主格なのだが、それでも e による重叙が起こっている。一つの推定として、opozita が不定複数主格および対格と同形であることから、その種の混同を避けるという判断がはたらいている可能性がある。

ただ、既に単文の重叙条件を分類した際にも明らかなように、動詞に先行する名詞は通常定形であって、やはり例外的なものとして残さざるを得ない。

2.2.3.5.2.間接目的語として機能する場合

2.2.3.2.で述べたように、この例は主に文学テクストに見られる。そして全ての例で重叙が常に起こっている。

(21) kontinent　　që　　quhet　　Evropë, e　që　　po　perpiqet

continent　that call-med.sg.3 Europe and that now strive-sg.3

t'i　　japë　　emrin　　një　botë të re

3.sg.dat. give-subj.ag.3　　name-sg.acc.df.　a　world new

「(人がそれに)新世界の名を与えんとする、ヨーロッパと呼ばれる大陸」

(Kadare: 39)

(22) ushtari　　i vrarë　　që　　ia　　mori

soldier-sg.nom.df. dead　　that　3.sg.dat.+3.a.sg.acc. take-aor.sg.3

revolverin　　dhe rrobat

revolver-sg.acc.df. and clothe-pl.acc.df.

「(主人公が彼の) 銃と衣服を取った戦死兵」(Agolli: 113)

(22) vepra　　që　　i　　dha　　emër　　qe "Baba Tomorri"

work-sg.nom.df. that 3.sg.dat. give-aor.sg.3　name-sg.acc.indf.　be-aor.sg.3

「彼が（それに）名付けた作品は『ババ・トモリ』であった」

(Shkurtaj/ Hysa: 270)[67]

また、特定の動詞にこの用法が集中することも示しておきたい。次の që i përkas を含む例は 3 例続けて見られたものである。

(24) mungesat　　e pupullit　　që　　i　　përkas

lack-pl.nom.df.　people-sg.gen.df. that 3.sg.dat. belong to-sg.1

「私が（それに）属する民衆の欠乏」(Kadare:101)

これも既に述べた与格の階層性という点から見て、当然であり予想通りの結果である。作家が文体の一つとしてこれを採用する場合でも、与格構造についてはその統語構造が維持されていると言っていいだろう。

---

[67] ちなみにこの文は Andon Zako Çajupi（1860-1933）の作品から採られている。

2.2.3.6.補文節内における重叙のまとめ

2.2.1.で先行論文を概観して 2.2.2.で問題点を挙げ、2.2.3.1 から 2.2.3.5.までで具体的な考察を行った。以下に本節の結論を述べる。

第一に、アルバニア語の単文では目的語の重叙表現がむしろ普通のものであるが、関係節の場合、屈折型関係代名詞 i cili による関係節では同様のことが成り立つ。

第二に、一方で非屈折型関係代名詞 që による関係節では必ずしもこれが成り立たず、むしろ関係節内での重叙が省略される傾向が強くなっている。この場合、次のような条件下で省略が行われている。①まず節内に形態面で明確な主語が示されている場合。②節内に主語は示されていないが、関係節内の主語が 1 人称であるため先行詞と文法的に一致し得ないことが容易に判別し得るか、先行詞と関係節内動詞の数が一致しないなどの理由で統語関係が判別し得る場合。③節内に主語がなく、節内動詞の形式（数や人称）からも主語を判別し難いが、先行文脈からただ一つの主語を特定することができる場合。④上記 3 つには該当しないが、繰り返し用いられているため主客関係が判別し得る場合。

このように　që 関係節で重叙がむしろ起こらなくなっているというのは単文における傾向と逆であるが、その場合でも単文の場合と同様に、文脈との関わりが見られるのである。